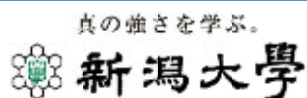


文部科学省 大学間連携共同教育推進事業

産学協働教育による  
主体的学修の確立と中核的・中堅職業人の育成

学生交流プログラム最終報告書





# 1. はじめに

近年、教育の現場では「アクティブ・ラーニング」の重要性が叫ばれ、様々な場面においてアクティブ・ラーニングの研究、実践がなされており、研究会等のテーマとしても多く取り上げられていますが、このことは、学生の学びに対するモチベーション変化がその目的の一つとされており、「主体的な学び」をいかに促進していくかがポイントになっています。多くの教育機関で、様々な「アクティブ・ラーニング」の取り組みや試行がなされ、色々なスタイルのプログラムが存在していますが、その成果を検証し、具体的な効果を把握するためには詳細な分析が必要であり、今後の課題とも言えるでしょう。

本報告書で取り上げる「学生交流プログラム」は、「大学間連携共同教育推進事業：産学協働教育による主体的学修の確立と中核的・中堅職業人の育成」（京都産業大学、新潟大学、福岡工業大学、成城大学）における事業の一つとして展開してきました。当初の目的としては「共同プログラムの試行の場」という位置づけで、学生の主体的な学びを促進することを目的として、5年間の事業期間のうち、「夏の合宿プログラム」を計4回実施しました。

試行錯誤を繰り返しながらプログラムを構築し、学生の変化や成長を調査・研究して翌年度に繋げていくことで、結果として一つの形態になりました。しかし我々は、本プログラムが完成形だとは考えておりません。試行錯誤の後に完成したプログラムではありますが、検討・改善の余地は十分に残っており、これからもさらなる進化・深化・発展が必要であると感じていますが、一方で、地域・専門・特色が全く異なる大学の学生が一堂に会しプログラムに取り組むこと自体が非常に貴重で珍しいものであり、そこから得られる学生の成長感や変化は、これからの大学教育における一つのヒントであるとも考えております。

我々の5年間の挑戦をご高覧いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

本報告書は、4大学の事業の柱の一つである「学生交流」について、その実施内容と考察、成果、課題を報告するものです。主な構成は、1. 実施概要、2. それぞれの年度の主な取り組みと考察、3. 参加学生のインタビュー、4. 実施後の振り返り、となっており、我々の5年間の軌跡を追っていく流れとなっています。

平成29年3月

京都産業大学・新潟大学

福岡工業大学・成城大学

## 2. 目次

大学間連携共同教育推進事業  
「産学協働教育による主体的学修の確立と中核的・中堅職業人の育成」  
学生交流プログラム最終報告書

.....

1. はじめに	1
2. 目次	2
3. 本事業の概要	3
4. 課題設定(問題意識)と軌跡	4
5. これまでの軌跡(年度ごとの実施報告)	5
6. 参加学生の言葉(インタビュー)	21
7. 学生交流プログラム ～総括と考察～	29
8. おわりに	32

### 3. 本事業の概要

#### 京都産業大学、新潟大学、成城大学、福岡工業大学による 大学間連携共同教育推進事業の全体像

本取組「産学協働教育による主体的学修の確立と中核的・中堅職業人の育成」の目的は、「産学協働教育」を始点として学士課程教育の質的転換を図り、学生の主体的な学修を促し、「地域社会の発展を担う中核的・中堅職業人」を育成・輩出することである。

#### 【参考】本取組における「地域社会の発展を担う中核的・中堅職業人」の定義

エリートのグローバルリーダーとしての役割を主に担うのではなく、日本の社会及び企業・組織において中核的・中堅的な役割を主に担い、堅実に支えていくグローバルな視点を持って活躍する人材。

現在、「主体的学修」は、大学教育における重要なキーワードである。本取組では、「主体的学修」を促す一つの始点が「産学協働教育」にあると考える。今日の多様化した学生の主体的な学修への動機付けは、学問的知的好奇心だけでは限界がある。「なぜこの勉強をする必要があるのか?」「今の学修が将来、社会でどのように役立つのか、繋がっていくのか?」という大学教育と社会との関連(レリバンス)を明示することで、大学教育で獲得する知識の有用性を実感させ、学生を主体的な学修に向かわせることが可能になるであろう。

この目的を達成するには、学生を主体的な学修へと動機付けるための大学教育と社会とのレリバンスが内包された産学が協働する教育プログラムの構築が求められる。本取組は、「申請された分野にかかる実績が卓越している4大学による連携であり、理論的背景や目的、育成する人材像等が明確化されている」と高く評価され採択された。異なる設置形態と所在地ゆえ、地域ニーズや学生気質も異なる4大学が連携することにより、地域差や規模等の違いを超越し、多くの大学に普遍に有効となるプログラムを構築でき、単独では実現できない教育プログラムの開発が期待されている。4大学は、これを具現化するために、新たな「産学協働教育プログラム共同開発」を中心として「専門人材の育成」「学生・教職員交流」「教育効果システムの構築」「海外の機関・大学との連携・交流」「産学協働人材育成ネットワークの組織化・拡大」を柱として掲げ、有機的に連動させながら事業を展開している。



## 4. 課題設定(問題意識)と軌跡

本事業では、産学協働教育が学生の主体的学修を促進するというテーマのもと様々な取り組みを行っており、本取組もその一つである。

4大学の1年生が一堂に会し、夏季休暇中に2泊3日の合宿形式のプログラムに参加することを通して、充実した学生生活を送るためのヒントを得てもらいたい、主体的な学びについて真正面から考えてもらいたいというテーマのもとにプログラムを構築した。

1年生の夏休みは、大学に入学して前期が終了し、4ヶ月ほどの学生生活を送った時期で、学生生活には徐々に慣れながらも、一方で、思い描いていた学生生活とは違ったと思う者、あらためて学生生活をどう過ごすべきかを模索する者、何かしたいが何をしたら良いかわからない者、より多くの刺激を求める者など、様々な層の学生が混在している時期でもある。こうした学生たちが、短期間ではあるが集中的に「主体的な学び」を考えるためのプログラムを実施することとなった。

平成24年度に実施計画を立て、平成25年度から計4年間・4回の合宿プログラムを実施した。毎年同じプログラムを実施するというのではなく、あくまでも年度毎にプログラムを見直し、学生にとってどのようなプログラムがより効果的に「主体的な学び」を促進させられるかを検討しつつ、プログラムを構築した。

1年目、2年目は、各大学がこれまでに取り組んできたキャリア教育プログラムをベースとして、「産学協働」をキーワードに、企業で活躍する方々をゲスト講師として招聘し、プログラムの提供、講演を実施した。具体的には、平成25年度は「企業人との連携・協働」、平成26年度は「卒業生との連携・協働」をテーマにプログラムを実施した。企業人、卒業生をそれぞれ招いて学生向けの講演やプログラムに参加いただく形式をとった。ここまでの2年間の経験をふまえて、平成27年度、平成28年度は、4大学の教員が中心となって授業を構築・実施した。

なお、プログラムの特徴としては、単に合宿プログラムを実施するだけでなく、①事前学習、②合宿プログラム、③事後学習という流れで、学生の学びを深化させていくことを目指した。事前学習では、遠隔講義システムを活用して、4大学の学生をインターネット上で繋ぎ、合宿前にあらかじめコミュニケーションを取ることとした。その際は、各大学の紹介をテーマとして、各々の大学が自大学を紹介するプレゼンテーションを行った。

合宿プログラムは、2泊3日という限られた時間のため、あえて「タイトな」スケジュールとし、盛りだくさんな内容で実施した。事後学習では、各々の大学でプログラムを受け手の感想や学んだこと、問題意識の整理を行った。

## 5. これまでの軌跡

### 平成25年度 実施報告

#### 1 実施日

事前学習：平成25年9月2日（月）※  
 当日：平成25年9月4日（水）、5日（木）、6日（金）  
 ※事前学習では、遠隔講義システムを活用して中継授業形式にて実施

#### 2 参加大学

京都産業大学、新潟大学、福岡工業大学、成城大学

#### 3 参加学生（サポーター学生を含む）

京都産業大学28名、新潟大学27名、成城大学18名、福岡工業大学35名 計108名が参加

#### 4 実施場所

- ・プログラム実施会場：成城大学（東京都世田谷区）
- ・宿泊先：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）※以下、オリンピックセンターという

#### 5 スケジュール

日程		内容
9月4日（水）	午後	開会式、コミュニケーション・トレーニング（協力：旭化成アミダス）、懇親会（オリンピックセンター泊）
9月5日（木）	午前	セイジュー・クエスト、ワールド・カフェ ※サポーター学生によるプログラム提供
	午後	企業によるトークセッション、 プレゼンテーション準備 （オリンピックセンター泊）
9月6日（金）	午前	劇によるプレゼンテーション、閉会式



#### 6 テーマ

### 「大学で学ぶ意味は何かを考えよう」

#### 7 実施内容

##### （1）事前学習

本プログラムを実施する前の準備として、各大学が自大学の参加学生に対して個別に事前指導を実施した。具体的には、チームビルディングやコミュニケーション・トレーニングを行うとともに、他大学の学生へ自大学についてプレゼンテーションをするという共通のテーマのもと、9月2日には遠隔講義システムを使用して、4大学同時中継によるプログラムを実施した。各大学は、それぞれ自大学の特徴を再認識するとともに、本プログラムにて一緒に学ぶ学生たちへの理解を深めた。



##### （2）当日のプログラム

###### ① 1日目午後：開会式

各大学の教職員、参加学生、サポーター学生が一堂に会し、成城大学3号館003教室にて開会式が行われた。



###### ② 1日目午後：コミュニケーション・トレーニング

本事業のステークホルダーである旭化成アミダス株式会社による体験型コミュニケーション・トレーニングが実施された。参加学生は18グループに分けられ、個人およびグループ毎にプログラムの進行がなされた。本プログラムの構成は①興味のあるもの・ことを共通の話題にして話してみよう、②チームで協力して目標を達成しよう、という目的のもと2部構成になっており、初めて直接対面した4大学の学生たちが、積極的に多くの学生と話することができる雰囲気づくり、そ



して制限時間内にグループ作業を行うということを経験させることにより、今後のプログラムをより効果的に展開できるための土台作りが行われた。

### ③ 1日目午後：懇親会

単に食事をとるだけでなく、他大学の学生へ積極的に話しかけるよう促した。また、翌日のゲスト講師も紹介し、翌日のプログラムへ接続が上手く移行できるようにした。

### ④ 2日目午前：セイジョー・クエスト

担当教員より、2日目のプログラムに関する全体説明が行われた後、各大学の先輩学生（サポーター学生）による「セイジョー・クエスト」が実施された。個人ワーク、ペアワークを経て、異なる属性で構成される6人チームを作り、チームビルディングおよび協働を体験する中で、互いを知り、チームで活動することの意義について体験を通して学ぶことを目的とした。

### ⑤ 2日目午前：ワールド・カフェ

4大学の教員および先輩学生（サポーター学生）により、クラスによって異なるテーマについて、ワールド・カフェ形式についてグループ・ディスカッションを実施した。

（テーマ一覧）

クラス名	テーマ	セッションテーマ	担当
スピード	大学の授業と学び	①今の大学・学部に入ってよかった？ ②つまらない授業には出なくていい？ ③大学の授業や学んだことは社会で役に立つ？	成城大
ダイヤ	人間関係	①入学してからこれまでに、人間関係で苦労したことは？ ②友人は多い方が、大学生活は充実すると思う？ ③自分に良い影響を与えてくれる人は誰？	新潟大
クローバー	コミュニケーション能力	①コミュニケーション能力がある人ってどんな人？ ②コミュニケーション能力って、どうして必要？ ③コミュニケーション能力は、どうしたら身に付くの？	京産大
ハート	働く・仕事	①何のために働くの？ ②企業人（ビジネスパーソン）ってどんなイメージ？ ③私の将来の夢	福工大

### ⑥ 2日目午後：企業によるトークセッション

他大学の学生、先輩学生、企業人、教員という様々な立場の参加者が交わることで、「大学生活を真正面から、本気で、綺麗ごとではない本音で考え、意見を交わし、その成果をこれからの大学に活かす」ことを目的として、ステークホルダーである企業人をゲスト講師としてお招きし、教員、学生、企業人によるトークセッションを実施した。学生を4グループに分け、30分毎に午前中のワールド・カフェの内容を踏まえて実施した。すべての回が終了した後、全体振り返りが行われた。

### ⑦ 2日目午後：プレゼンテーション準備

成城大学から国立オリンピック記念青少年総合センターへ会場を移した後、3日目の最終プレゼンテーションについて説明がなされた。学生に対し、グループ毎に本プログラムのテーマである「大学で学ぶ意味は何かを考えよう」という問いに対する答えを、本プログラムで学んだ内容をもとに1グループ5分間で劇形式にて発表するように説明があった。学生たちは、グループ毎に模造紙等を使用して、限られた時間で準備を行った。





⑧ 3日目午前：劇によるプレゼンテーション

全18グループが劇形式にてプレゼンテーションを実施した。審査員は参加者全員であり、評価シートにて各グループの審査を行った。



⑨ 3日目午前：閉会式

閉会の挨拶後、プログラムは無事終了した。

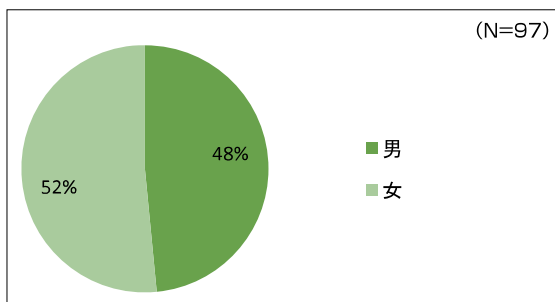


## 8 アンケートの実施

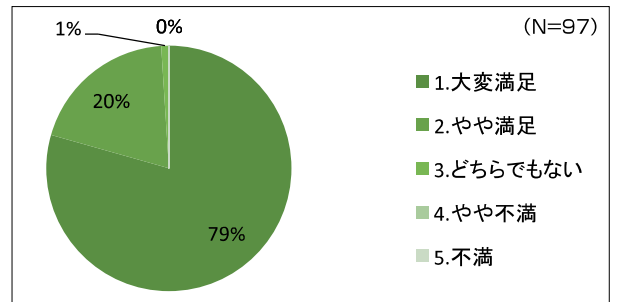
本プログラム終了後に、参加学生全員にアンケートを実施した。回答結果は以下のとおりである。

\*原則、学生の言葉をそのまま引用しております。

(1) 回答比



(2) 本プログラムへの、あなたの満足度を教えてください。



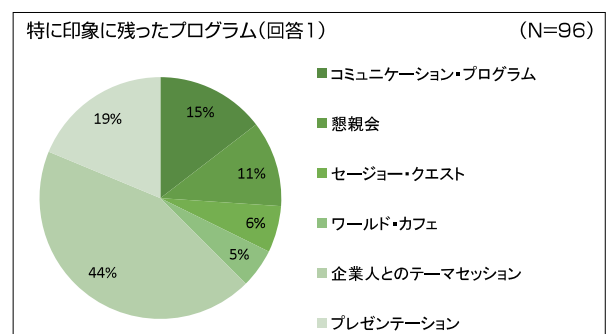
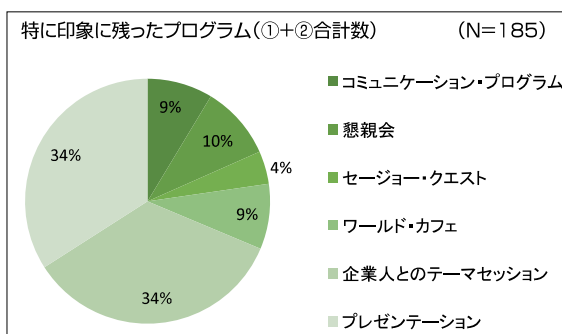
(3) 本プログラムを通してあなたが感じたこと・気づいたこと・学んだことを教えてください。どんな些細な事でも構いません。

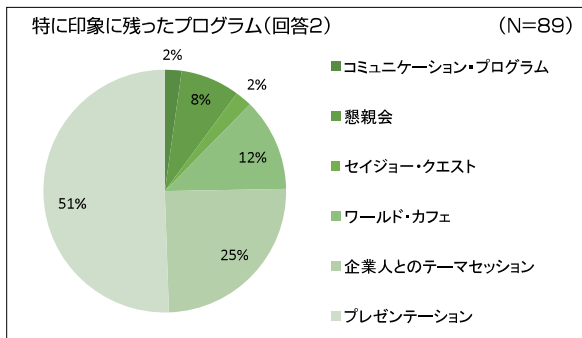
- 春学期間の自分は基本、友人という人よりは、知り合いだけという人が多い。だから一人ぼっちという状態が多かった。しかし、それは積極性のない自分が原因であるということはこの合宿で思い知らされた。今もし自分が進歩しているとしたら、この合宿のおかげだと思う。
- 今回プログラムを通して、本当にたくさんのことを学べたと思う。同じ大学1年生なのに、しっかり将来の自分について考えている子が多くて驚いた。企業人の4人の方の話や最後のみんなのプレゼンを見て思ったのは、自分から行動してみるという

ことが大切なのだなと思った。人間関係だけでなく、あたりまえの日常でも、自分の発想を変え新しいことに挑戦したい。

- 今しかできないことが多くある。学業はもちろん、遊び、進路選択、そして今回のようなプログラムに飛び込むこと。それらを十分に楽しみながら多くを経験することが大事。自ら行動し、多くのことへ飛び込む。
- 自分にはまだまだ力があることがわかった。自分一人では気づけなかっただろうが、他人と、それも他校の生徒と関わることによって、自分自身について深く考えることができた。

(4) 特に印象に残ったプログラムはどれですか。(2つまで回答可)

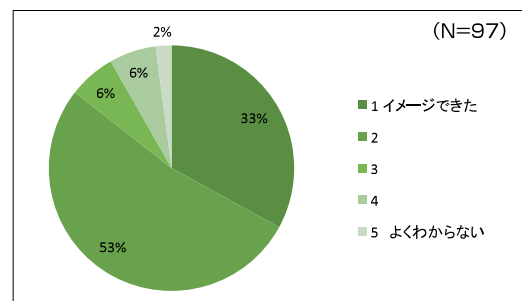




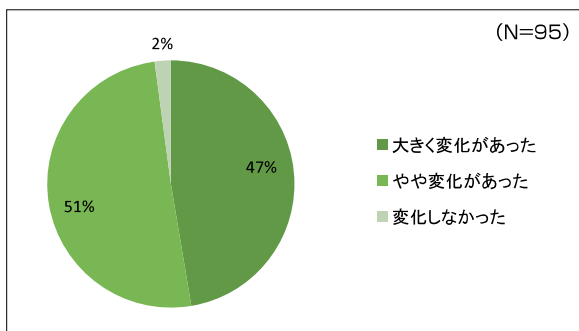
**(理由)**

- (コミュニケーション・トレーニング選択) 他の人との協力が絶対に必要であった。このプログラムは協調性を養えると思ったから。
- (懇親会を選択) 懇親会であまり人と話せず積極的にプログラムに参加していかうと思えたから。
- (セイジョー・クエストを選択) 緊張をほぐすため、又仲間意識等よく考えて作られていたのがよかった。
- (ワールド・カフェを選択) 普段こんなに語ることはないから!まじめな話ができる雰囲気、みんなが本音を出してくれる雰囲気が嬉しかった。
- (企業人とのテーマセッションを選択) 嫌だと思う人ほど自分以外の人からも嫌だと思われるはずだから、あえて話しかけに行くという話がとても印象に残っている。
- (プレゼンテーションを選択) 失敗も成功もどちらも体験できた貴重なプログラムだから。

**(5) 本プログラムのテーマ「大学で学ぶ意味」について、自分なりの目的・目標を具体的にイメージすることはできましたか?**



**(6) (5) の考えは、プログラムの参加前と比べて変化しましたか?**



**■上記の答えを選んだ理由を教えてください。**

- (大きく変化があったを選択)
- 将来のために大学で専門的な知識を学び、なりたい職業につくことに意味があると思っていたが、自分に今は関係なくてもどこかわからないところで役に立つかもしれないので、学べるものは何でも学ぶことが大切。
  - 得意なことだけ勉強すれば良いと思っていたが、大学は人生の教養の場だと気づき、食わず嫌いや、専門以外の勉強もがんばろうと思ったから。
- (やや変化があったを選択)
- 行く前は全然具体的ではなかったが、他の学生や企業の方々考えを聞いて頷く自分がいた。まだ自分の中で確信は持っていないが、十分すぎるキッカケとなった。
  - まだ終わったばかりなので、どのくらい変化があり、以後につながるかわからないため
- (変化しなかったを選択)
- 考えは持っていたけど、プログラムを通じて変化はなかった。格言を口にして聞いただけじゃ何もかわらないと思う。自分の言葉じゃないんだから。
  - 自分の目標は自分が熟考したものですので、それが揺らぐことはありません。

**■来年以降も本プログラムは実施予定ですが、プログラムの改善について意見があれば教えてください。**

- 2年生用のプログラムも実施して欲しいと思った。
- もう少し細かいスケジュールが分かると、時間を有効かつ、一つ一つのプログラムをより深く話し合えたと思います。
- 今回、天候等で時間が削られたので遅れた場合に参加者が最後までやり遂げられるプログラムに変更できるように準備してほしい。
- 企業人とのセッションは1人30分というのは短すぎると思います。1時間くらいあってほしい、また、懇親会みたいに一緒にごはんを食べながら語れたら、最高です!!人数ももうちょっと少なくして全員と触れ合えるくらいにするといい気がします。1大学15人くらいで。
- スケジュールが常に時間ギリギリで余裕がないように感じた。

**■自由記述欄**

- 今までの人生において、この3日ほど最高なものはない。本当にありがとうございました!!
- なんとなく申し込んだ合宿でこんなに貴重な体験ができるなんて思わなかった。今後このような機会があれば必ず参加しようと思う。
- サポーターとして参加できるならやってみたい。
- 毎年開催地を変えて、4年に一度本学でするような(オリピック的な)プログラムにしてはどうでしょうか?
- 世の中にどんな会社があるか、これから調べていきたい。
- 3日間は参加しない3日間よりも確実に有意義な時間を過ごせたと思う。
- 自分の予想の遥か上をいく面白さでした。今回のプログラムに関わってくれた皆様ありがとうございました!!!
- できることなら来年のプログラムに参加して先輩にアドバイスしたり、今年よりもいいものにしてあげたいです。

# 平成26年度 実施報告

## 1 実施日

事前学習：平成26年8月7日（木）＊

当日：平成26年9月2日（火）、3日（水）、4日（木）

＊事前学習では、遠隔講義システムを活用して中継授業形式にて実施

## 2 参加大学

京都産業大学、新潟大学、福岡工業大学、成城大学

## 3 参加学生（サポーター学生を含む）

京都産業大学33名、新潟大学37名、成城大学26名、福岡工業大学38名 計134名が参加

## 4 実施場所

- ・プログラム実施会場：成城大学（東京都世田谷区）
- ・宿泊先：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

## 5 スケジュール

日付	内容
9月2日（火）	開会式
	プログラム開始 コミュニケーション・トレーニング I（学生サポーター）、II（旭化成アマダス）
	懇親会
9月3日（水）	モーニングセッション・プログラム
	OB・OGとのコラボセッション （各大学のOB・OG 19名参加）
	最終発表準備
9月4日（木）	発表
	閉会式
	終了



## 6 テーマ

### 「出会いでキツクになりたい自分」

＊4大学の教職員と前年度参加した学生を中心としたサポーター学生にて会議を行い、テーマを設定。

## 7 実施内容

### （1）事前学習

本プログラムを実施する前の準備として、各大学の教職員がそれぞれ事前指導を実施。具体的には、チームビルディングや目標設定の手法を学ぶとともに、他大学の学生へ自大学についてプレゼンテーションをするという共通の課題を掲げ、平成26年8月7日には遠隔講義システムを使用して、4大学同時中継によるプログラムを実施した。各大学は、それぞれ自大学の特徴を再認識するとともに、本プログラムにて一緒に学ぶ学生たちへの理解・交流を深めた。



### （2）当日のプログラム

#### ① 1日目午後：開会式

各大学の教職員、参加学生、サポーター学生が一堂に会し、成城大学3号館003教室にて開会式が行われた。



## ② 1日目午後：コミュニケーション・トレーニングⅠ・Ⅱ

前年度よりプログラムを発展させ、コミュニケーション・トレーニングⅠをサポート学生がコーディネートした。本プログラムが最初のセッションとなるため、できるだけ多くの人と話し、和気あいあいとした雰囲気をつくり、コミュニケーションプログラムⅡへの接続を目的とした。コミュニケーションプログラムⅡでは、本事業のステークホルダーである旭化成アマダス株式会社による体験型コミュニケーション・トレーニングが実施された。参加学生は20グループに分けられ、個人およびグループ毎にプログラムの進行がなされた。本プログラムでは、コミュニケーションのとり方や、集団による意思決定の進め方について理解を深めた。



## ③ 1日目午後：懇親会

サポーター学生による進行により、プログラムを展開。前年度、初日は特に自大学の学生と固まってしまう傾向が強かったため、より多くの方とコミュニケーションを取れるよう工夫した。サポーター学生たちは、各大学の特徴を盛り込んだ質問を用意し、それぞれの大学に興味を深め、交流するきっかけをつくることを目的とした。



## ④ 2日目午前：モーニングセッション・プログラム

各大学の教職員と学生サポーターがファシリテーターとなり、3人一組と少人数のチームを編成し、プログラムを展開した。教職員とサポーター学生、そして学生が同じチームになりながら食事をとることにより、より安心して本プログラムに臨むことができる雰囲気づくりを行った。



## ⑤ 2日目午前・午後：OB・OGとのコラボセッション

4大学のOB・OG総勢19名を招き、OB・OG、参加学生、サポーター学生によるグループを形成し、グループワーク、全体共有を行った。本セッションでは、学生が身近に経験すると思われる問題をケーススタディーにて取り上げ、それを通じて、目的の共有の大事さ、役割分担の難しさ、優先順位のつけ方、指示の出し方など、人のマネジメントの難しさというものを感じてもらうことを目的とした。ワールド・カフェ形式をとったため、参加者が少人数で自由に発言しながら、他の人々の様々な意見にも耳を傾ける機会を増やした。また、セッション終了後は、振り返りを行い、自身の卒業生という身近な社会人の方と交流することにより、社会人と学生では物事の捉え方が違うという気づきや、大学での学びに主体的に取り組むことの大切さを学んだといった意見が多数挙がった。



### テーマ紹介

ケースディスカッション①：大学生活をどのように充実させていくか、目標を意識しよう！

ケースディスカッション②：テニスサークルの合宿幹事編

## ⑥ 2日目午後：最終発表準備

本セッションは、学生交流プログラムの集大成として、プログラム全体を振り返り、その意味付けを行うとともに、グループのメンバー同士で感じたことを共有することで、プログラム終了後の大学生活を、より一層充実させることを目的とし、実施した。6人で1グループとし計20グループを編成し、グループ毎にサポーター学生がつき、進め方についてフォローを行った。今年度の最終プレゼンテーションのテーマは「いつかの自分へメッセージ」とし、発表方法は自由とした。メッセージを伝える相手として、「過去の自分」、「現在の自分」、「未来の自分」の3つから1つを選択し、内容を検討した。



## ⑦ 3日目午前：最終発表および閉会式

成城大学から国立オリンピック記念青少年総合センターへ会場を移した後、3日目の最終プレゼンテーションについて説明がなされた。学生に対し、グループ毎に本プログラムのテーマである「大学で学ぶ意味は何かを考えよう」という問いに対する答えを、本プログラムで学んだ内容をもとに1グループ5分間で劇形式にて発表するように説明があった。学生たちは、グループ毎に模造紙等を使用して、限られた時間で準備を行った。



## 8 アンケートの実施

本プログラム終了後に、参加学生全員にアンケートを実施した。回答結果は以下のとおりである。

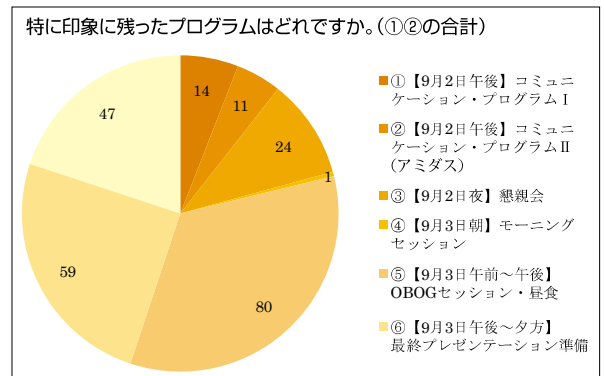
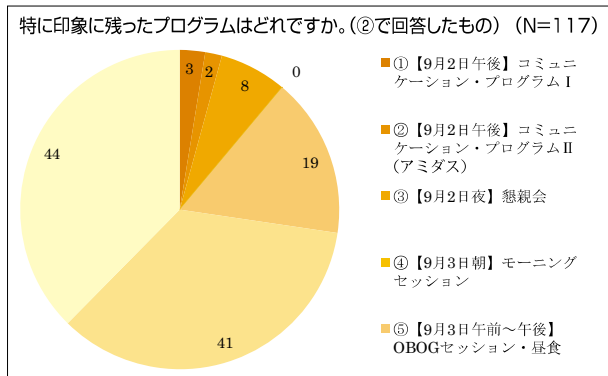
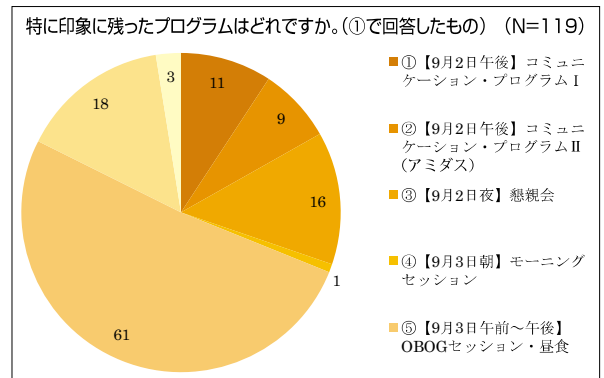
\*原則、学生の言葉をそのまま引用しております。

### (1) 本プログラムを通して学んだことはどのようなことですか

- 私が一番学んだと思うことは積極性を持つことです。人とかかわるうえで自分からかかわっていかなくてはならないと思ったし、自分の気持ちを伝えていかなければ自分のことも相手のことも理解できないと思いました。また、リーダー性についても学び、みんなで協力して頑張ることの大切さを考え直しました。
- 食わず嫌いでいても仕方なく、何事もやってみないと楽しくとか面白いというのはわからないということ。
- 自分から意見などをアウトプットしていかないと、誰のためにもならないということ。
- 失敗も勉強になるということを改めて実感した。
- 自身の成長のためにはまず行動が大事だという事。今まで考えることは多くしてきたが今回のプログラムのようなものに参加することはあまりなかった。参加すると決めてからも、不安で逃げたいと思っていたが、いざ参加すれば自分自身について多くの発見をすることができた。それは自分の成長に役立つし、また参加したことで新たな繋がりもでき、行動は自分に良い影響を与えると学べた
- 積極的なことは良いこと。今までの自分の行動に自信を持って良いと教えてもらった。チャンスはいつでもどこにもある。それを掴むためには待っているのではなく自分から行動しなくてはダメ！ 出会いは新たなエネルギーを生む！！
- 人とのつながりを大切にすべきだと感じました。このプログラムで出会った人たちとずっといい関係でいたいと思います。そして積極性が必要だと思いました。
- いろんな考えの人がいて、自分では思いつかない方向から考える人もいて考えも十人十色なんだと学んだ。
- 意識高い人（このプログラムに参加する/しないの選択肢があったが、参加することを選んだ人）たちとの話し合いは普段の友達とはしないような話（将来の話など）までできるということ。
- 「協調性」と「積極性」です。積極性をもって声を出していくことで協調性がうまれることもあるということを経験して最終プレゼンを初めとして様々なプログラムで感じました。
- まずは話しかけてみることです。見た目、偏見にとらわれず、話してみることで全くイメージが変わって、色々な人間関係を築くことができました。今後、大学内でも使っていけると思います。
- 小さな思いもどんな思いも大切に何でも行動に移すこと、自分の殻に閉じこもらず沢山の人と関わること。
- 出会いの素晴らしさ、このプログラムがなかったらみんなと出会えてなかった。コミュニケーションの大切さ、仕事場でも人間関係を築き上げるためにとても重要な事だと学んだ。笑顔でいる、あいさつをしっかりと、積極的に話をするのが大事だと学んだ。自分の考えを相手に伝える事の大切さ。
- 本当に成長できるプログラムだと思いました。学校の講義だけでは伝えきれないコミュニケーションの楽しさを学べ本当に良いプログラムなため、来年の生徒さんにもおススメしたいです。
- 様々な考え方の人と多く接することができたのはとても良い刺激になり、今後の大学生活に大きな変化をもたらすとともに、大きな自信ができました。

### (2) 特に印象に残ったプログラムはどれですか(2つまで回答可)

- ① [9月2日午後] コミュニケーション・プログラムⅠ
- ② [9月2日午後] コミュニケーション・プログラムⅡ
- ③ [9月2日 夜] 懇親会
- ④ [9月3日 朝] モーニングセッション
- ⑤ [9月3日午前～午後] OBOGセッション・昼食
- ⑥ [9月3日午後～夕方] 最終プレゼンテーション準備
- ⑦ [9月4日午後] プレゼンテーション



### (3) 今後の大学生活ではどのようなことが重要であると学びましたか。また、活かしたいと思われましたか。

- やりたいからやる、面倒だからやらないという姿勢ではなく、どれだけ面倒なことでも、目的意識をもって行動することが大切だと感じました。
- 今後の大学生活をより充実したものにするために、挑戦する気持ちを常に持ち続けたいです。
- いつまで待っていても、なにも起こらないということ。自分から動いてアクションを起こせば、「やらずに後悔」ではなく「やって後悔」という前向きな結果を手に入れられるということ。
- 相手に自分を受け入れてもらえるようなコミュニケーションを取るよう努めること。本当に仲良くなりたい相手とは、本当の自分を曝け出すことが大切だということ。
- 今をがんばって生きること。今輝いて生きることによって他人にも影響を与えられるし、自分もいきいきと生活できると思った。自分に自信を持てるように毎日の努力を怠らないようにしたいと思った。
- 今後グループで意見を1つにまとめるときは自分の意見をしっかり言って他人の意見を聞いたあと自分の認識と相手の意見にズレがないか1度聞いてみるのも重要だと思った。
- 「チャンスが与えられた時、自分が0じゃ意味がない」ではないが、日頃から、目標づけをしっかりとすることの大切さというものを学んだ。
- 「一歩」踏み出すことです。積極的になるとということも一歩踏み出した結果だし、このプログラムにも自分から動いて参加したからこそ今回のような学びを得ることができたので、一歩踏み出して、自分からつかみに行くということが重要であると感じたので、今後の大学生活の中では受け身になっているだけでは手に入れないような物事に取り組んでいきたいです。
- ホウ・レン・ソウの大切さ、目標や期限を明確にすること、相手の意見を汲み取り、尊重する姿勢、作業の細分化
- 最大限に自分がいる、今の環境を生かす。「どれだけ多くの経験をしたか」が「生きる力」につながるということ。行動力と自信の大切さ。
- 大学生活では自分は何かをやるまえに色々と考えたりして不安が前に出て、なかなか最初の1歩が踏み出せないけれど、難しいかと思ったりするかもしれないけど、まず何事にも迷ったら踏み込んでみようと思うことが重要だと思った。
- 初めて会った人でも見ただ目で判断するのではなく積極的に会話をすることが重要であると学んだ。またその会話の中で共通点を見つけることでより仲を深めることができると思った。また、なんにでも積極的に取り組むことも重要であると学んだ。失敗をおそれずに何事にも積極的にチャレンジしたい。
- やはり何事も自分から行動しないとにも始まらないんだと思います。それは3日間のプログラムを通して感じたことです。何事も自ら行動することで円滑に進むことが多かったです。時にはリーダーシップを発揮して、グループをまとめることもしました。ゆえにそのような力も身に付いたと思います。自らが積極的に行動することで、全てが変わっていくとさえ感じました。
- 自分の考えや思っていることをすべて相手に伝えることがこれから議論をするにあたって大切であることを学んだ。

### (4) 自由記述欄

- 今回合宿に参加してみて、私は人見知りなほうであまり積極的に話しかけたり、意見をいったりすることが苦手な方であると思っていたが、少し勇気を出して積極的に行動することができた。受け身で行動するよりも自分の問題として真剣に考えることができ、主体的に行動することは面白いことであると発見することができた。合宿に参加できて本当によかった。
- 楽しんで学ぶとはまさにこのことだと思いました。私も来年サポーターとして関りたいです。
- 事後学習で、友達が「課題を見つけにくいのも大事だったかもしれないけど、自分の現状、ゆずれない信念を確認するための場でもあるから、失敗とか成功はないと思う」と言っていたのがとても心に残っています。合宿のときの自分と今の自分も大きく変わっていると思うし、何かつかめなくても何かは影響を受けた、それでいいのかなと思いました。
- 大変な3日間だったけれど、充実した3日間でした。想像していたよりもずっと短い時間だった。皆、想像していたよりもずっと優しくしてくれた。
- たくさんの様々な年代の人や地方の人と話ができて、とても良かったです。想像していた以上のすばらしいプログラムに参加できたこと、充実感にあふれています。来年はぜひサポーターとしてもう一度参加したいと思っています！
- プレゼンの時間をもう少し欲しかった。しかしすごく楽しかったのでいつかまた交流した人たちに会いたいです。
- 今回のプログラムで夏休み前の自分と今の自分とは良い意味で成長できたからと思っています。2、3年になって機会があればまた参加したいと思っています。

# 平成27年度 実施報告

## 1 実施日

事前学習：平成27年8月27日（木）＊  
 当日：平成27年9月 2日（水）、3日（木）、4日（金）  
 ※事前学習では、遠隔講義システムを活用して中継授業形式にて実施

## 2 参加大学

京都産業大学、新潟大学、福岡工業大学、成城大学

## 3 参加学生（サポーター学生を含む）

京都産業大学37名、新潟大学30名、成城大学18名、福岡工業大学35名 計120名が参加

## 4 実施場所

- ・プログラム実施会場：成城大学（東京都世田谷区）
- ・宿泊先：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

## 5 スケジュール

日付	内容
9月2日（水）	開会式
	コミュニケーションワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ
	懇親会
9月3日（木）	プログラムⅣ
	プログラムⅤ
	プログラムⅥ
	ファイナルセッション準備
9月4日（金）	ファイナルセッション
	閉会式



## 6 テーマ

「大学では学ぶ意義とは—それぞれにとっての主体的学修について考える—」

## 7 実施内容

### （1）事前学習

本プログラムを実施する前の準備として、各大学の教職員が事前指導を実施。チームビルディングや目標設定の手法を学ぶとともに、他大学の学生へ自大学についてプレゼンテーションをするという共通の課題を掲げ、平成27年8月27日には遠隔講義システムを使用して、4大学同時中継によるプログラムを実施した。各大学は、それぞれ自大学の特徴を再認識するとともに、本プログラムにて一緒に学ぶ学生たちへの理解・交流を深めた。



### （2）当日のプログラム

#### ① 1日目午後：開会式

各大学の教職員、参加学生、サポーター学生が一堂に会し、成城大学3号館003教室にて開会式が行われた。

#### ② 1日目午後：コミュニケーションワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ

本プログラム最初のワークとなるコミュニケーションワークでは、アイスブレイクを兼ねて3日間を一緒に過ごす学生同士の信頼関係を築くことを目的として実施された。運営は昨年度以前の受講生で構成されたサポーターが中心となり、受講生の視点を大切にしながらも、「主体的」とはどういう行動かを意識できるようなプログラムを4大学の教職員とともに作り上げた。コミュニケーションワークは3部構成で作成されており、コミュニケーションワーク①「『好き』で自分をしてもらおう」という自己紹介ワークでは、12のテーマを設定し、受講学



生自身が自分でテーマを選択し、グループを構成してワークを実施した。コミュニケーションワーク②では、「意見を交換して、問題を解決しよう」というプロセスワークを実施し、1グループ6,7人で構成し、タイムキーパー、書記、まとめ役といった役割を決めてディスカッションを進めた。コミュニケーションワーク③では、ケース・スタディを下に、様々なタイプがいる中で、どのように主体的に行動すべきかを考えた。また、各グループの中に教職員とサポーターが入ることにより、グループ内での議論を活性化させた。



### ③ 1日目午後：懇親会

懇親会時には受講学生が事前に自分自身の名刺を用意し、受講学生同士で名刺を交換した。また、全員がひとつの輪となり、1人ずつ本合宿での目標や意気込みを発表し、1日目のまとめを行うとともに、翌日へのモチベーションの向上を目的としてサポーター学生が運営した。懇親会后、宿泊先である国立オリンピック記念青少年総合センターに移動し、1日目は終了した。



### ④ 2日目午前：プログラムⅣ

「大学で学ぶとはどういうことか～学び合いについて考える～」テーマのもと、全体セッションを行った。このプログラムの中では、大学で学びあうということを目的としながらも、大学で学ぶということはどういうことかについて一人ひとりが自分の考えを持って人に伝えることが出来るようになることを目標に協同学習を実施し、16のホームグループを形成して、次のセッションにつなげた。

### ⑤ 2日目午前・午後：プログラムⅤⅥ

プログラムⅤでは、ホームグループを再編成した専門グループ形成し、教員がそれぞれ担当を受け持ち、それぞれの大学の特色を活かした授業を展開した。また、プログラムⅥでは、再度ホームグループに戻り、専門グループで学んだ内容を共有するジグソー学習法を用いた。受講生からは、普段は習うことが出来ない他大学の教員の授業を受けることで新たな気づきを発見することが出来たこと、また他大学の学生と何度もディスカッションを繰り返すことにより、多様な価値観や考え方を知ることにより、大きな刺激を受けることが出来たという感想が寄せられた。



### ⑥ 2日目午後：ファイナルセッション準備

本プログラムで学んだことの正課として、「各ホームで、この夏季学生交流プログラムのPRポスターを作成し、1人ずつ全員がプレゼンテーションせよ!」という課題が与えられ、グループ毎にPRポスターの作成、及びプレゼンテーションの準備を行った。「目的・相手・内容・構成・状況」を自由に設定することをあらかじめ説明され、グループ毎に受講した学生だからこそ伝えられる視点を盛り込み、各グループで検討した。



### ⑦ 3日目午前：ファイナルセッションおよび閉会式



ファイナルセッションは、6,7人で1組とし、計18グループに分かれてそれぞれのポスター発表形式にて行った。発表は3分間プレゼンテーション、質疑応答、感想を含め、1回あたり5分間とし、計7回実施することにより、全員が発表できるようにした。後半では、自由セッションとし、自由に他のグループのポスター発表を見ることにより共有を深めた。

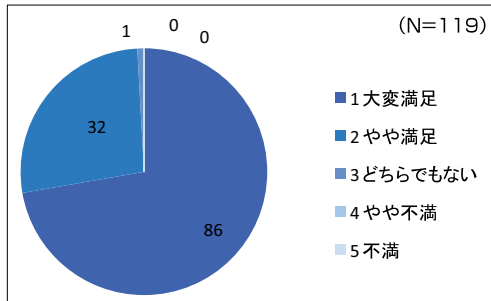


## 8 アンケートの実施

本プログラム終了後に、参加学生全員にアンケートを実施した。回答結果は以下のとおりである。

\*原則、学生の言葉をそのまま引用しております。

### (1)本プログラムへの満足度を教えてください。また、その理由を教えてください。



#### (理由)

- 自分を試すことができたような気がします。実践・実験がいくつかできたように思います。みんなとチームワークを発揮できて、はじめてなのになくさん喋れたのが大変満足の理由です。
- 発言することへの抵抗がなくなったことが良い傾向だと思えます。参加前は少し人見知りなところがありましたが、それも同時に解消されました。また私が得たかった新しい価値観や刺激もあったので良かったです。
- 自分が思っていた以上に内容の濃い学習ができたのでとても満足しています。他大学の人と交流することしか考えていなかったけど、授業などで大学の意義を考えさせられ、これからの大学生活につながるような学びができた。もちろん、すごく濃い交流もできて満足しかないです。
- プログラムの講習は他大学の先生のものだったりして、これから先そんなのできるかわからないものだから、すごく面白い。興味深い授業だった。プログラムを始める前の「友だちできるかな」とかいう不安も、最後は涙をながすぐらいにまできてたので、

中身も成長したり、対人関係、コミュニケーション力も成長の後悔すら、自分のなかに、取り入れて学べるものになったから。

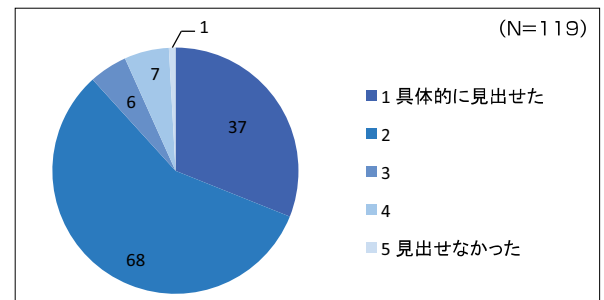
- プログラムに参加できたことは満足だけど、初日からもっと積極的になっていたらと思った。
- プログラムの内容の濃さ、それによる各大学生同士の心の開きの早さ、4つの地域の価値観があり、その混ぜ合わせたことにより、考え方の多さ、深さを知りえたため。
- 様々なグループワークをすることで、自分にはない価値観などを知ることができ、視野が広がったから。他の人の発表などを聞いたりして、刺激を受け、今後のやる気につながったから。
- ただ交流をして友達をつくるだけでなく、グループごとに「大学で学ぶ意義」について話し合ったりするなど意見交換をする場面がとても多く、自分の考えだけでなく別の考え方を知ることができたから。
- とても多くの人と、ほぼ1日中ディスカッションをする機会が初めてで、最初は自分の意見に自信を持てずに、みんなの意見に圧倒されるばかりでしたが、最終プレゼンの頃には、今回のテーマであった”大学での学び”に対して、自分の意見を持つことができました。
- 4大学との交流によって様々な価値観を得ることができたし、もっと新たな価値観や他大学の先生の授業を全部聞いてみたいと思ったから。行けたら来年も行って学びたいと思ったから。
- 4大学交流した人たちはみな志が高く、よい刺激になり、目標のレベルが上がる。
- 日頃では大学で学ぶ意義について考えることがなかったので、明確に学ぶ意義を考えることで、学生生活を有意義に使うことができると思った。

### (2)本プログラムのテーマは

「大学で学ぶ意義とは一それぞれにとっての主体的学修について考える」です。

自分なりに大学で学ぶ意義を見出せましたか？

今のあなたの考えに近いところに○をつけてください。



### (3)本プログラムを通して、今後の大学生活ではどのようなことが重要であると学びましたか。

また、本プログラムで学んだことをどのように生かして活きたいと思いましたか。

- 自分が本当にしたいことを見つけるには、実際にそれが何かは、その世界に足を踏み入れてみないと実感として感じられないかもと思いました。遠回りをするのもあると思うけど、興味のある事には挑戦してみようと思いました。
- 自分の学科のことを勉強をするのも大切だけど、今の社会では世界にも目を向けなければならないと思ったので、日本だけでなく外国のことも意識していきたい。自分から発言できるように、日頃から考えられるようにしたい。
- 勉強して資格をとったり、知識をつけることこそ大切と思っていたが、今しかできない交友関係はとても大切にしたいので、友人と出かけたり、連絡をとることも大事だと思った。本当に何でもできる時期なので、外に出ているんなことを楽しんで学びたい。
- 今後の大学生活で主体的に学んでいく姿勢！
- 自分の学びたい・学ぶべき学問に力を入れることはもちろんのこと、新しいもの・ことに自ら足を踏み入れることが大切だと学びました。このプログラムでたくさんの人と関わることの大切さに

改めて気づかされたので自ら新しいコネクションを広げていきたいと思いました。

- 何にでも挑戦して、自分の視野をもっと広げることが重要だと思いました。だから、今後は、あえて自分の苦手なことにもっと取り組み、新たな可能性を見出せていけるようにしたいと思います。
- 自主性、主体性 相手にばかり頼らず、まずは自分から動く力。自分の意見を恥づかしがらずにどんどん発信していきたい。興味があることは、遠慮せずどんどんchallenge! とにかく行動をおこす！
- しっかりと「自己」というものを持つことが大切だという風感じた。これからは周りに流されず、自分を出していきたいと思う。許される範囲で。
- 独学では学べないことを積極的に吸収していくことが重要であると学んだ。(例えばコミュニケーションやプレゼン力など) 大学でしか学べないことはたくさんあると思うので、積極的に色々

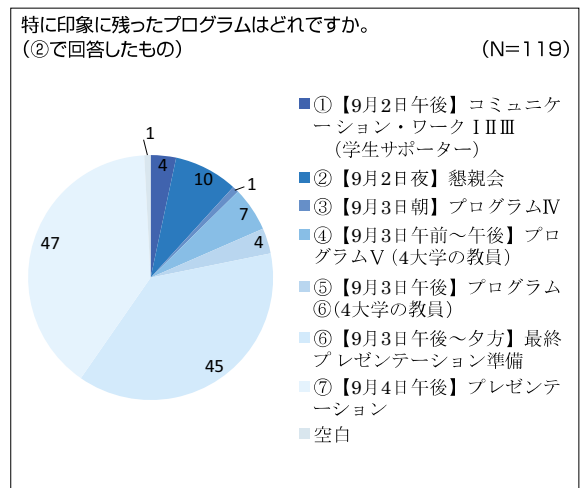
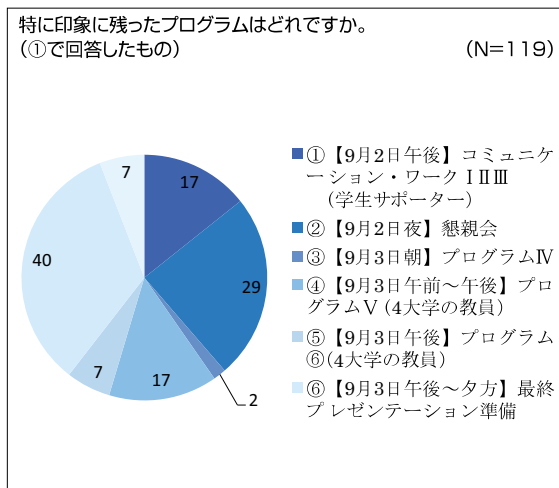
なことに取り組んでいきたいと思った。

- グループの進行役をする人がリーダーと言うわけではないんだと思いました。自分の意見を言える人、言えない人、色々なタイプの人がいる中で、自分がどう動くのか考えて行動することが大切だと学びました。残りの大学生活で、多くの人と関わっていき時には意見交換をする場もあります。その時に、この学びを活かしていきたいです。
- 人と話すときは、自分の意見ばかりを主張するのではなく、相手の話も聞くこと。「積極的傾聴」を意識して、人の話を聞く。(例:相手の目を見る。適度に相づちを打つ。)

- 時間を守ること。規則正しい生活をする。積極的に行動・発言をすること。妥協しないこと。これらのことを活かして、私は今後の大学生活で規則正しい生活を、遅刻・欠席をせず生活していきたいと思います。思ったことは積極的に発言したいと思います。

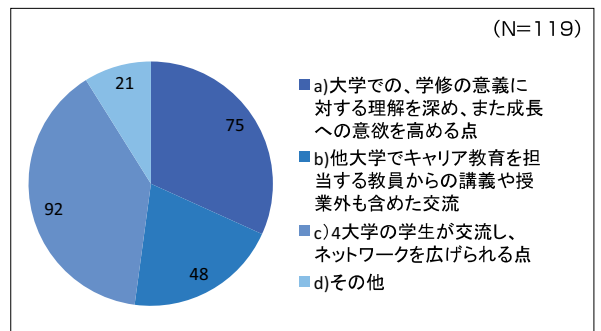
#### (4) 特に印象に残ったプログラムはどれですか。(2つまで回答可)

- 1. 【9月2日午後】コミュニケーション・ワーク①②③ (学生サポーター)
- 2. 【9月2日夜】懇親会
- 3. 【9月3日朝】プログラム④
- 4. 【9月3日午前～午後】プログラム⑤ (4大学の教員)
- 5. 【9月3日午後】プログラム⑥ (4大学の教員)
- 6. 【9月3日午後～夕方】最終プレゼンテーション準備
- 7. 【9月4日午後】プレゼンテーション



#### (5) 実際に参加してみて、あなたが、本プログラムの「魅力」と感じることを教えてください。(複数回答可)

- a) 大学での、学修の意義に対する理解を深め、また成長への意欲を高める点
- b) 他大学でキャリア教育を担当する教員からの講義や授業外も含めた交流
- c) 4大学の学生が交流し、ネットワークを広げられる点
- d) その他



#### (6) 自由記述欄

- 普段、普通に生活していたら出会うことが出来ない友達に出会えて、たくさんのことを吸収できた3日間でした。
- 来年はサポーターとして参加したい。
- このプログラムに参加して、最高の仲間に出会えて最高の夏になりました!ありがとうございました。
- 人と話すときにいつも”嫌われないかな”と思すぎて、初対面だったりあまり話したことがない人と話すことが怖かったのですが、参加者みんなが前向きで優しくて向上心の高い人たちだったので、ネガティブな感情を捨てて話すことができました。本当に来てよかったと思います!
- サポーターの先輩の働きに感動した。
- また、自分たちの学校内で事後学習がありますが、事前学習の中継をしたみたいにして事後学習にもそういうのがあればいいと思います。
- ほんとにちょっとした興味から応募したのですが、実際に参加し

- て本当に良かったと思っています。自分にとってとても大きな3日間でした。この機会を作ってくださいありがとうございました。
- このプログラムを支えてくださった方への最大の感謝と、自分としてもこのプログラムへの参加は最高の記憶となりました。本当にありがとうございました。
- ディスカッションでは皆の本音の意見を聞くことができた。
- ディスカッションをたくさん設けてくれたので、とてもいい機会だった。
- 他大学のひとと仲良くなれるのが最大のメリットだと思いました。貴重な機会を用意していただき、ありがとうございました!
- それぞれの地域の事などを聞くことができたので良かったです。最終課題のプレゼンの準備がとても大変だったけどとても思い出に残る時間でした。3日間がとても短く感じました。

# 平成28年度 実施報告

## 1 実施日

事前学習：平成28年8月25日（木）＊  
 当日：平成28年8月31日（水）、9月1日（木）、2日（金）  
 ＊事前学習では、遠隔講義システムを活用して中継授業形式にて実施

## 2 参加大学

京都産業大学、新潟大学、福岡工業大学、成城大学

## 3 参加学生（サポーター学生を含む）

京都産業大学33名、新潟大学37名、成城大学25名、福岡工業大学38名 計133名が参加

## 4 実施場所

- ・プログラム実施会場：成城大学（東京都世田谷区）
- ・宿泊先：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

## 5 テーマ

### 「大学で学ぶ意義を考える」

合宿の趣旨・目的は、「大学で学ぶ意義」の答えを学生自身が見出すことによる、主体的学修への動機づけにある。同じ1年次生同士が、他大学の学生たちと大学生活について様々な観点から議論することによって、大学で学ぶ意義とは何なのかを集中して考える仕掛けをつくることにより、多くのことにチャレンジし、悔いのない大学生活を送ることの大切さに気づかせることを目的として、プログラムを構築している。

## 6 実施内容

### ■ プログラム内容

「主体的な学び」を促すために、4大学が自大学において、それぞれに強みとしているプログラムを持ち寄り実施。4大学の教員・学生が一堂に集まったの合宿型プログラムであるからこそ実現できる教育効果を重視し、過年度の実施内容を踏まえ、「ジグソー法」という学習理論を用いて協同学習を行うことにより、4大学が強みとして持つプログラムとそれぞれがもたらす学修成果を、学生は短時間で実感できる。

この実績をモデルケースに成果物①を作成した。

### ● ジグソー法

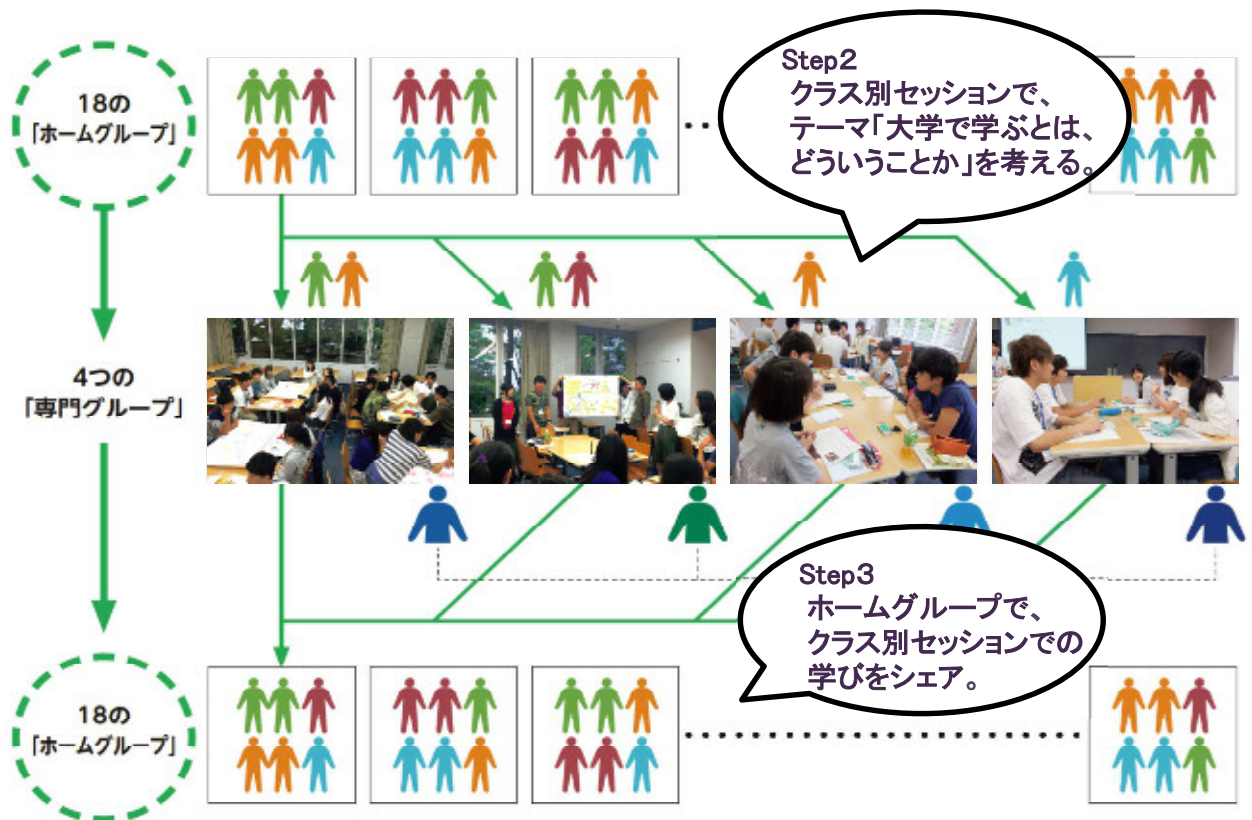
全員が学ぶ学習課題を複数の下位課題に分け、各学習者は所属グループ（ホームグループ）を離れ、自分が割り当てられた下位課題を専門的（集中的）に学習する集団（専門グループ）で協同的に学ぶ。その後、ホームグループに戻りそれぞれが学習した内容を持ち寄り互いに自分が学んだ内容を紹介しあい、ジグソーパズルを解くように全体像を協力して浮かび上がらせる手法。それぞれが学習した内容は、自分しか詳しく知っている者がいないため、他のメンバーに教える必然性が生じることで教育効果を高める。

### ■ プログラムの流れ（実施パターン例）

- ▼ 全体で学習テーマ「大学での主体的な学びとは」について説明。
  - ・ 協同学習を行ううえでの重要な点として「参加者全員が学習課題（テーマ）への理解を深めることを、参加者全員の目標とする」という重要点を共有する。
- ▼ 18の「ホームグループ」を形成。各グループには4大学の学生が混在する。
  - ・
- ▼ 4つの「専門グループ」に分かれ、4大学の教員が提供するテーマ（学習課題の下位課題となる題材）をもとに、大学で主体的に学ぶ意義を考える。
  - ・

Step1  
 協働学習の  
 マインドセットを行う





▼ 「ホームグループ」に戻り、「専門グループ」で学習した内容をそれぞれが説明し合い、主体的な学びについて議論を深める。議論した内容をグループ発表し、まとめを行う。

Step4  
各個人でテーマに対する  
自分なりの答えをシェア  
することで学びを深める。



## ■ 実施授業（平成28年度実施実績）

### <京都産業大学>

グローバル社会において、今後、海外で学んだ(外国人も含めた)学生と一緒に働き、競争する時代を生きるため、「海外」という切り口から、大学で学ぶ意味を考えた。具体的には、海外の大学における授業(学び)の質と量の圧倒的な違いを知ることによって、日本の大学で学んでいる自らの状況について考えた。また、日本の大学における様々な課題、批判を題材に、大学生である自分は、それらをどのように捉えているのかについてグループでディスカッションをした。最後に、それぞれの内容を発表し、こらからの大学生活をどのように過ごすのか、一人ひとりが意見を述べた。

### <新潟大学>

メインテーマである「大学で学ぶ意義とは-それぞれにとっての主體的学修について考える」について、わが国「日本」という切り口から考える。具体的には、日本社会(特に産業界)の視点にたつて、たとえば、「皆さんがいる日本はどのような社会か、日本社会、産業界、世の中から若者は何を求められているのか、今後、日本においてはどのような社会、環境変化が予想されるのか」など、将来の生き方、働き方についてイメージさせ、そこからの逆算で今、大学生活で何が必要かなどについて、資料等を題材にグループで話し合う。

最後には、それぞれ発表を行い、お互いの気づきをシェアしながら学び合った。

### <成城大学>

大学で学ぶ価値と本質を追究するために、「過去」に焦点をあて、各時代を生きた諸先輩方は、何のために大学に通いその学びが今にどのように活かしているかを考察した。先ず1950年代の大学生へのインタビューコメントの紹介、続いて1980年代の大学生と、2010年代の大学生にはトークライブを行い、大学進学率の推移や時代背景等の統計データもあわせて紹介した。

過去も今も変わらない学びの意義、一方、今だからこそ学ぶ意義もあり、それは何かをワールドカフェ形式で議論した。時代の変化とともに、個は進化し続けることと、そのために生涯学び続けることが重要で、そのためには、居心地の良いところに埋もれず、社会を鳥の目、虫の目、魚の目、獣の目で見ることの重要性を再認識した。

### <福岡工業大学>

「未来」の視点から学ぶことの意味について考えた。具体的には、今後、テクノロジーがさらに進化した未来において、もしも、「仕事のない世界」「余暇の過ごし方に悩むような時代」が来たとしたら、「どのように生きたいか」「何をどのように学びたいか」について考え、それぞれの意見を共有した。あえて、学ぶことの意味を問い直し、それぞれにとっての学びの本質や学びの欲求について考えることが目的であった。その上で、改めて、現代において大学で学ぶ意義について考え、メンバーと伝え合いながら、自分自身の今後の大学生活の在り方について再考した。



### ファイナルセッション

合宿で学んだ成果として、グループでのポスターセッションを行った。テーマは「学生交流合宿のPR ポスターを作成する!!」。全員がプレゼンテーションを行えるようローテーションし、投票により順位づけを行った



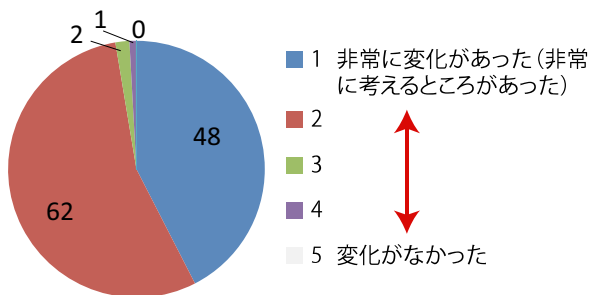
## 平成28年度学生交流プログラムアンケート結果(回答:113件)

本プログラム終了後に、参加学生全員にアンケートを実施した。回答結果は以下のとおりである。

\*原則、学生の言葉をそのまま引用しております。

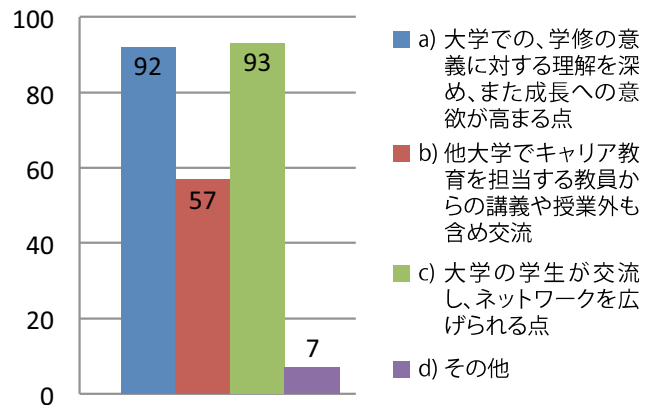
### 〔質問〕

本プログラムのテーマは「大学で学ぶ意義とは—それぞれにとっての主体的学修について考える—」です。自分なりに大学で学ぶ意義について開始前と終了後では変化はありましたでしょうか?今のあなたの考えに近いところに○をつけてください。



### 〔質問〕

実際に参加してみて、あなたが、本プログラムの「魅力」と感じることを教えてください。(複数回答可)



### 受講学生の声

- 日本の学生の状況を知って、大学で学ぶ意義を意識してこれからの大学生活を送りたいと思った。
- 自分の性格と向き合うこと。長短所をはっきりさせて伸ばせるところを伸ばして、伸びないところは今まで以上に努力して伸ばす。
- 学ばない人生よりも、何かを広く深く学び、常に新しいことにふれて、自分を進化させていった人生のほうが良いと思った。まずは自分の視野を広げるために、本を読んでみようと思った。
- 夢の実現まで道のりがはっきりしたため、ぼやっと過ごしていた今までよりも次の一步を踏み出せるようになる。そんなところに活かします。
- 来年も是非開催してほしいと自分もサポーターとしてもう一度このプログラムに参加したいです。サポーターの先輩方の姿勢ややる気に非常に感動しました。
- 受動的ではなく能動的に、目標、目的を持って物事に取り組む。私は将来の夢がまだ漠然としているので「自分は本当に何がやりたいのか」ということを常に意識しながら生活を送る。
- 一步踏み出せば、対応してくれる環境があるのが大学の利点だと感じたので、積極的に行動していくことが重要。経験・引き出しの一つとして活かす。
- 自分達が思ってる以上に自分達は積極的じゃないと思った。大学に通えていることはとても恵まれていることだから、もっと積極的になろうと思った。

## 6. 参加学生の言葉(インタビュー)

ここからは、本プログラムに参加した学生の中から各大学数名を選抜して実施したインタビューについて、①受講生としての感想、②学生サポーターをした学生はサポーターとしての感想を披露したい。

### 設問(1) 学生交流プログラムに参加してみても一般的な感想とその理由を教えてください。

#### 福岡工業大学

##### Aさん ※受講生として参加

違う地域の他大学4大学が集まることはめったにないことなので、初めての体験がたくさんでした。何よりも他大学の学生さんから受けた刺激はとて大きなもので、今の自分があるのは、この学生交流があったからといっても過言ではないくらいです。何事にも、一生懸命ベストを尽くすという姿勢、チャレンジ精神。1年生の夏は本当に本当に充実したものになりました。楽しかったです。

##### Bさん ※受講生として参加

学生交流の中で異なる大学・地域の人たちと話すことで、刺激を受けたり焦りを感じることも多々あった。そういった焦りや悔しさから、今の自分を変えなければならないと考えさせられたので、参加してよかったと思う。

また、学生交流を終えてからの学生生活が劇的に変化し、今の自分を形成している基盤であるので、本当に参加して良かったと思う。

##### Bさん ※学生サポーターとして参加

サポーターとして、動く中で考えることが多くて、戸惑うことや、他のサポーターの能力と自分の差に落ち込むことがあったが、それが良かったと思う。大変だった分、おもしろさや成長があり、2年生と4年生のどちらも濃厚な時間を過ごさせていただいた。またこのサポーターの経験が、サークル、インターンシップや就活など色んな場面で活かれているので、サポーターになって良かったと思う。参加者の1年生のみんなの生き生きとした姿を見るのもすごくおもしろいし、そのサポートができたこともうれしく思う。

##### Cさん ※受講生として参加

学生交流プログラムに参加したことで、その後の大学生活をとて充実したものにできたから。プログラムの中でのワークや、コミュニケーションを通して、積極的に自ら行動した方が得るものが大きいと感じました。なので、プログラム後の大学生活では、自分自身がちょっとでも興味があったり、自分の将来の

ためになりそうなことには、積極的に挑戦していくようになりました。

##### Cさん ※学生サポーターとして参加

自分自身が学生交流に参加して、本当に良かったと思ったので、その気持ちを後輩たちにも感じてほしい、そして、今後の大学生活を充実したものにしたいと思い、サポーターをさせていただきました。

サポーターとして参加するのは、やはり大変で、自分自身に足りない所や自分にはできることに気付くことができ、私自身のこれからの課題を見つけることができました。また、1年生のときに学生交流に参加した、他大学の学生との再会にとて刺激を受けることができました。

#### 新潟大学

##### Aさん ※受講生として参加

自分自身のキャリア形成について考えるきっかけとなるプログラムでした。私はこのプログラムに参加する前にキャリアの授業を受けておらず、事前学習で初めて自分のキャリア形成について考え始めました。考えたといっても当時は漠然としたことしか考えることができなかつたと思います…

また私にとってはこのプログラムに参加したこと自体がひとつの挑戦でした。知らない人たちが集まるプログラムに参加し、他大学の学生と知り合えたり、普段お話することができない大人の方とお話できたことが大きな経験になりました。プログラムを通して何事も自分次第で変わるものなのだと思います。

##### Aさん ※学生サポーターとして参加

受講生として参加したときは新しい世界を知ったという感覚でしたが、サポーターとしての参加した時のほうが自分自身について考えたような気がします。サポーター同士であまり集まることのできなかつた準備期間の中で、自分が何をできて何をすべきかを考えていたような気がします。サポーターという一年生の前に立つことの多い役割となって自分が受け身のままで駄目だということも強く感じました。人前に立つことが得意ではないと感じたので仲間のサポーターが前に立つときのサポートができれば、と思いながらやっていたのですが、うまくサポートできていたかはわかりません…

サポーターとしての参加は受講生の時の参加より密度が濃く、サポーターができて良かったと思うのですが、自分の欠点も多く見つかりました。

### Bさん ※受講生として参加

大学生生活の大きなターニングポイントになった。それまで中身の無い大学生生活を送っていたが、目標に向かって努力すること、アクションを起こし続けることの重要性を学んだから。

#### ①仲間との出会い

様々なバックグラウンドを持った学生が、自分の目標に向かって行動している姿に刺激を受けた。また、その仲間との関係性も3年半経った今でも継続していること。

#### ②アクションを起こしながら考えること

社会人の方の話を通して、悔いのない学生生活のためには「行動」が重要だと考えさせられた。

### Bさん ※学生サポーターとして参加

#### 【コミット経験と目的意識】

①直接接点を持てる回数が少ない中、最後まで妥協せずやりきる経験ができた。

大学のテストやサークル活動が忙しい中、オープニングプログラムを妥協せずに考え抜き当日実行した。他大学の学生からの厳しいFBに対して期日を守り履行した。主体的にアイデアを提案するという得意なところを実践できた。タイプの違うメンバーと協力して巻き込みながら達成するという普段ない経験ができた。

②「目的」を達成するために必要なコンテンツが何かを考え実行する経験ができた。

アイデアベースではなく常に「目的」に対して的確な内容は何かを考え続けた。普段なら適当に決めて流してしまうところも、参加学生100名が目的を達成するためにはどのようなアプローチがベストかを考えた。

### Cさん ※受講生として参加

新潟という小さなコミュニティだけでなく、様々な環境で学ぶ学生と生活し、また時間を共有できたことは大きな収穫となった。

今でも同大学の参加者だけでなく、他大学の学生ともたまに連絡を取るような仲で、物事の視点の違いや、意識の高さから刺激を受けることが多い。

### Dさん ※受講生として参加

4大学から集まった、大学で学ぶ意義を考えるとこの目的意識の高い仲間たちと過ごす3日間そのものが貴重な経験であったと感じている。大学1年生という時期だからこそ、自分の人生を選択し、進めるのは自分自身であるということ、自分にはないさまざまな価値観や考え方に触れることが自分の人生

を豊かにしていくことを改めて考えさせられた。このプログラムが、大学生生活の原点であるとも考えている。

### Dさん ※学生サポーターとして参加

参加者に大学で学ぶ意義を考えてもらい、プログラム後にそれぞれの道に自信をもって進んでいくと欲しかったと考えて臨んだが、参加者へ満足のいくサポートができたという実感やプログラムを通しての参加者の変化を大きく感じることができなかったことが心残りではある。しかしながら、プログラム当日のサポーター内での動き・リーダーシップ・視野の広さなど自信を感じられたことは収穫である。

### 京都産業大学

#### Aさん ※受講生として参加

大学一回生の段階で地域の離れた学生、また学部も様々な人たちとの交流は新鮮だった。

最後のプレゼンも今までの総括ということで、改めて思い出す場だったし、これから大学をどう過ごすかを真剣に考えられたと思う。

#### Aさん ※学生サポーターとして参加

当初は学生に向けてどのように接すればいいのかと考えることもあったが、周りを見ると困ってる人などもいて、そういう人への声かけを心がけたし重要だと感じた。

もう少し全体の（サポーター同士）意思疎通が取れていればさらにスムーズにことがいったと思う。

#### Bさん ※受講生として参加

・プログラムをきっかけに、同じ大学で信頼関係を結べる友達ができただけ

・大学の4年間を無駄にしたいくない、という思いが強くなったし、4年間を通して無駄にならない時間を過ごせたから

#### Bさん ※学生サポーターとして参加

・後輩のやる気を削がないで、真面目なことを考えさせる難しさを経験して、相手に伝わるコミュニケーションの練習ができたから



## 成城大学

### Aさん ※受講生として参加

ずっと東京で暮らしている私にとって、めったに出会うことのない他県の学生と交流する貴重な機会となりました。また、成城の他学部・他学科の学生と親交を深められたこともうれしかったです。最も印象に残っているのは、社会人の方とのディスカッションです。「若いころの好みは一生変わらない。だから今のうちにいろんなものに挑戦して、好きなものを増やそう」「営業は苦手だったが、『話す営業』ではなく『聞く営業』にする工夫をした」といった話は、今でも覚えています。ただ、私が参加した第1回学生交流プログラムは2回目よりもレクリエーション色が強く、「学び」が少ない気がしました。

### Aさん ※学生サポーターとして参加

「主体性」とは何かを本プログラムのサポーター活動を通して学びました。自分ができることを、誰かに教わるのではなく自ら考え実行することは難しく、責任が伴う怖さもありましたが、同時に達成感がありました。また、200人以上が関わるプログラムの運営に携われたのは、貴重な経験です。

### Bさん ※受講生として参加

・地域や専門や価値観の異なる同い年の学生の話や、自分の考えを相手に伝えることにより、残りの大学生活を後悔なく、自分にとって有意義なものにしたいと強く思った。自分が経験したことのないような事に取り組む人など、目標を持って自分の意思で色々なことに挑戦している同世代の学生がいることを知り、なんとなく色々なことに挑戦するよりも、目標や考えを持って取り組むことで自分を成長させることができると感じたから。

・視野が広がった。地方での暮らしをしてみたいと思った。東京近郊と地方では習慣や生活環境などに様々な違いがあることを知ることができた。どちらか片方が良いというわけではなく、それぞれに良いところと不便なところがあるなと感じた。(就職活動で勤務地を考える際にとっても参考になった。)

### Bさん ※学生サポーターとして参加

「ワークの企画」を受講生に楽しんでもらえて、自ら学んでもらうプログラムにするにはどうしたら良いかを仲間と試行錯誤するのが難しかった。こうしたら良いと言う答えがないため、話し合いを重ねたが、簡単に会える距離ではなかったため、直接ではなくネット上でやり取りをするのが大変だった。受講生がワークの内容を理解して学びを得てくれるか心

配だったが、予想以上に上手く行って達成感を感じた。「企画運営の手伝い」100人を超える参加者のためのプログラムを企画運営することの大変さを知った。余裕を持ったスケジュールや細かい部分のシミュレーション、スタッフの配置などの準備の細かさに驚いた。「当日のサポート」4日間という短期間での受講生の成長に驚いた。1日目は人見知りや話せなかった人が多かったが、プログラムが進むうちに自己紹介を自ら始められるようになっていたり、初対面の人と議論をすることができるようになっていったのが嬉しかった。

### Cさん ※受講生として参加

当時、プログラムに参加するまでは、授業やサークルといった単調な生活の繰り返しだったが、各地方から集まった同年代の学生とともにワークを行うことが非常に新鮮だった。普段の授業は一方向的に講義を受けるような座学が多かったが、自分の意見を他者と共有するような自己発信の場が設けられていたことで、自分に自信がつけたり人前で話すことの面白さを感じたりした。他大学との交友関係を持てたことも大きな収穫であり、その後の学生生活に大変良い刺激を与えてくれたと思う。

### Cさん ※学生サポーターとして参加

自分が参加者だった時の感動を伝えたくてサポーターになった。プログラム成功に向けて毎日のように話し合い、SNSを活用して連絡を取り合ったりした。自分が提供したプログラム内容が、どこまで1年生に良い影響を与えられたかははっきりとはわからないが、自身が大きな達成感を得られたのは間違いないと思う。サポーターと一緒に務めた人たちとは今でもつながっており、貴重な体験ができた。プログラム終了後、全員での振り返りができていなかったため、反省会はやるべきだと思う。

### Dさん ※受講生として参加

まず、この機会がなければ出会えなかった人と出会えたから。参加してから数年経った今でも、自分の想っていることを話せる一生の友人ができた。

次に、たくさんの刺激を得られたから。グループワークやプレゼンテーションを通じて、自分の良いところや改善点を知ることができ、その後はグループでも個人でも、自信を持って納得のいく発表ができた。また、他者の意見を聞くことで、自分にはなかった発想に触れられ、様々な角度から物事を考える大切さや考え方を学べた。

## Dさん ※学生サポーターとして参加

毎年、後悔と反省はあったものの、運営側を経験することで、気付きや学びをたくさん得られたから。同じサポーターや参加者など相手を考えて、その人に分かるように伝えたり、そのために自分が正確に理解しておいたり、スムーズに進行できるように細部まで具体的に準備しておいたりするなど、他者と何かを成し遂げる際に必要なことを学べた。これはサポーターをやらなければ、分からなかったと思うので、貴重な経験ができたと思う。

**設問(2)本プログラムのテーマは「大学で学ぶ意義とは-それぞれにとっての主體的学修について考える-」ですが、今振り返ってみて、自分なりに大学で学ぶ意義について変化はありましたか。**

### 福岡工業大学

- プログラム参加後、一番変わったのは、メモをとるクセがしっかりついたことです。何気ない、先生の雑談も、面白い、役に立つかも、と思ったことは全てメモするようになりました。直接的に役に立たない授業も何かしらの形で、後から役に立つということを学んで、授業に取り組む姿勢も少し、変わったと思います。
- 大学入学当初は、専門のことだけを学びたいと考えていたが、学生交流に参加してからは、人間的な部分の成長も大切なことだという変化があった。社会に出てから何が必要かを考えるようになり、勉強する幅が広がった。
- 大学は先生がたんと説明して、それを板書するといった講義が多く面白味を感じる事がありませんでした。しかし、分からないことがあれば、先生や先輩に質問したり、オフィスアワーに行ったりして自ら行動することで、苦手な分野だったり克服することができました。大学は、自ら行動しなければもったいないと感じました。講義以外にも、先生や先輩、各学科の学生、職員さんとコミュニケーションをとり、たくさんの情報を得たり、会話から学ぶことも多いなと思いました。

### 新潟大学

- 大学で学ぶ意義について、プログラムに参加して考えが変化したというよりは、何も考えていなかったことを考えるようになったと思います。一年生の前期はみんなが受ける講義をそのまま何も考えず受けていましたが、プログラムに参加してからは自分が興味のある講義を選ぶようになりました。

- ①興味を持った事柄について自主的に調べるようになった
- ②学外のイベントに参加して社会人接点を持ち、様々なキャリア観を学ぶようになった
- ③「つまらない講義」も1つでも何か学ぼう、1つでも面白いネタを見つけようと自分なりの工夫をすることで楽しむようになった
- ④本を読むようになった
- 何気なく選んだ授業や必修科目の授業を当たり前のように入れることが多かったが、プログラムを通して、それら一つ一つは今すぐ必要なくても、いつか必要になるのではないか、という考えを持つことができた。
- 私の所属学部である教育学部で専門的な知識や実践経験を養うことが最重要かつ唯一無二の「大学で学ぶ意義」であると思っていた。しかし、プログラムを通して人生でどのようなことを成し遂げたいのか、大切にしていきたいのかという軸を形成していくことが重要であり、大学生活中に自信をもって誇れるものにしたいと思った。非常に良い意味で、大学卒業後の進路を深く悩まされ、迷わされた。

### 京都産業大学

- 留学が間に挟んでいるので厳密に大学生活とは言えないが、最初のなんとなく授業を受ける意識から、中途半端で終わるのはみっともないと本気で勉強をしたことはあった。
- もともと大学で学ぶ意義について考えて参加していたので、大きな変化はなかった

### 成城大学

- 他大学でとてもアクティブな学生がいて、もっと動くようにしよう、やりたいときにそれをやろう、という影響を受けました。自分が持っていなかった考えや価値観と出会う機会として、非常に良いプログラムだったことは間違いありません。
- 受講前はとにかく色々な経験をして、学部の勉強を頑張るという考えだったが、卒業後に自分がどうなっていたいか、そのために何が必要かを考えることが重要だという考えに変わった。卒業後にどうなっていたいかがわからなかったため、世代を超えて多くの人の生き方を聴き、少しずつどうなっていたいか見えてきた。

- 授業やサークルに参加することだけが大学で学ぶということではないと気づけた。プログラムのよう大学生活や将来について考えることも学びの一つであるし、友人と話したり遊んだりすることも学びである。そのようなことを1年生の早い段階から気づけたのは大きな収穫だった。参加している学生は皆個性豊かで、そこから受けた刺激も多かった。
- このプログラムに参加する前は、周囲の人が大学に行くから大学に行くとしか考えていなかったが、参加者として参加した後は、自ら進んで積極的にやりたいことをやるのが大学で学ぶ意義だと思ようになった。サポーターとしての参加後は、参加者へのアドバイス等を通じて、なぜ、他の学校ではなく大学なのかということを考えるようになり、4年間という時間や人との出会いなど様々な要素を備えていて、絡み合っているからこそ、自分で考えて進んで行動することが大事で、これが大学で学ぶ意義だと気づけた。当初よりも深めることができた。

### 設問(3)本プログラムを通して、大学生活にどのような影響がありましたか。

#### 福岡工業大学

- とりあえず休みを作ることはあまりしなくなりました。自分がやると決めたことは、何にでも挑戦し、最後までやり切ることを4年間やってきました。向上心をもったみんなに出会えたこと、充実した2泊3日を過ごしたことで、普通に大学の講義とアルバイトだけではもったいないと思うようになりました。様々な場面で頑張れる、活躍できる私がいととても嬉しいです。
- 楽より苦を選ぶようになった。それまでは、楽に単位を取ろう、楽に生きようとばかりしていたが、それだとなまらないし、成長できないと思い、少し無理して頑張るようになった。そうした方が、自分に返ってくるものが大きいし、達成感が得られるので苦を選ぶようになった。
- 何度も言っていますが、プログラムに参加した後の大学生活は、とても充実したものになりました。自ら主体的に動かなければ、この大学4年間はとてももったいないと思うようになりました。友達によく、「いろいろと頑張ってるね〜」と言われることがあります。頑張っていると言うより、楽しんでい

るといった方が正解かなと思いました。楽しみながら、色々なことに挑戦することで得ることは多いと思います。大学生活ただただ講義を受けて、帰るだけでは、もったいなさすぎると思いました。

#### 新潟大学

- 勉強面だけではなく、いろいろなことに挑戦することも大切なのだなと感じたので、一人旅に挑戦したりもしました。その中で失敗もあったけれどその失敗も含めて自分の経験になっていると思います。いろいろな考え方を持つ同世代のひとに知り合えて自分の考え方の幅も広がったような気がします。
- 大学という箱から飛び出すことの重要性を学び「とりあえず行動」するようになった。
  - ①生産性のない日々だけを送ることからの脱却
  - ①学外での活動への参加  
自分と考え方や目標の違う人とつながることは有意義と考え、他大学の学生が参加するような場(イベントなど)に1人ででも参加するようになった。その中でいろいろな人たちの話を聞く、自分の思いを話すということを繰り返していくことで自分自身の考え方を磨いていった。  
また、参加側だけでなく運営側にも興味を持ちお声のかかったイベント運営などに積極的に参加するようになった。そこで、自分の「やりたい」が少しずつ見つかっていった。
  - ②社会人接点を増やす  
学生で「すごい!」と思える人はそれほど多くはないが、社会人には多くいた。その社会人のビジョンやこれまでの活動、人生の振り返りを聞くと物事に対するモチベーションが上がった。そして、これまで考えなかった「尊敬する人」という存在が何人もできた。  
その人たちのビジョンや考えを自分自身のロールモデルにし、また自分のキャリアや考え方と擦り合わせて自分の将来を少しずつイメージするようになった。
  - ③「やりたい」事を主体性を持ち自分の責任で実行する以上の①②を通して、自分が学生時代に「やりたい」事(主体的に熱量を持って取り組み続けられる事+ユニークな事)が明確になり地元の魅力をPRする団体を立ち上げた。そこで2年連続100人規模のイベントを実施し、「目的」を定め、それに対する「目標」を設定し妥協せずに取り組む事ができた。そして、今は後輩に引き継ぐ仕組みを整えている。4年次は、暇だったはずだが、後輩のキャリア支援にフルコミットしてしまった。

- 能動的に動こうとするときにプログラムの経験が後押ししてくれる。ネガティブになった時の心の支え
- 1つ目は、大学卒業後の希望進路の変更である。教師を志していた私であるが、さまざまな価値観や考え方に触れ、さらにその後もっと知らないものに出会いたいという気持ちが生じ、結果的に就職活動という道を選択するに至った。2つ目は、本気で人生について話すことができ、互いの成長を高め合える仲間が出来たことである。物理的な距離があるからこそ、恥じらいもなく自分の不安やささえさらけ出すことができ、仲間のことも自然と親身に考えている。

#### 京都産業大学

- 入った頃はどうかかなーと漠然と毎日の学生生活を過ごしていたが、このプログラムの後は自分だけの大学生活を作りたいと思い、当初は考えていなかった長期留学を応募した。結果、他の道もあったのかもしれないが、いい意味で楽しい大学生活だった。
- 幅広いコミュニティーを獲得できた。特別チャンスをとくさんいただくことができたので、私にはない考え方を持っている人がいることや伝えることの難しさを痛感した。

#### 成城大学

- 会いに行きたい人が増えました
- 目的を持って物事に取り組むようになった。具体的には、学部の授業やキャリアの授業、部活での役割、アルバイト、資格の勉強、趣味などできるだけ多くのことを両立した。仲良くなった福岡の友人を訪ねたり、東京へ来てもらったりこのプログラムがなければこんなことはなかったと思う。福岡を訪れた際、東京では電車で移動して観光をするのに対し、福岡では友人が車で色々なところへ連れて行ってくれ、地域による違いを感じた。
- 単純に、いろいろなことを頑張ろうと思うようになった。何かを一生懸命やればそれに見合った成果を得られるはずであり、せっかくの4年間を無駄にしたいと思えなかった。また、そう考えて行動している仲間に出会ったことは大きな刺激になった。どうせ学生をやるなら、楽しくやってやろうという気

持ちになり、物事に積極的に取り組めるようになった。

- まず、自分のやりたいことをやりたい、頑張っている仲間と一緒に自分も目標に向かって頑張りたいと強く思い、自分の専攻の学習に力を入れたところ、特待生になることができた。次に、他者へのふるまいが変わった。サポーターの仕事を通じて、焦っているときほど、おおらかな心を持ち、他者の目線に立っておもいやらないと、指示が伝わらなかつたりチームでの連携が取れないなど、良くないことが多くなることを学んだ。

#### 設問(4)自由記述欄

##### 福岡工業大学

- 貴重な体験をありがとうございました。
- 私は、3回関わらせていただいているからなのかもしれないですが、学生交流で仲間になった人とは、今だにSNSなどでつながっていたりして、近況を見たりして、「私は今こんなことやってます」とかをみると、負けていけないと思って、頑張ろうと思える原動力の1つであるので、学生交流は本当に貴重なプログラムだと思う。ですので、形は違ってもこういったプログラムは継続してほしい。
- ぜひ、このようなプログラムを続けてほしいなと思いました。違う地方の学生と交流することは、自分自身に大きな刺激を与えることができると思うので、この出会いを大事にしていきたいと思いました。このプログラムを企画し、考えていただきありがとうございました。このプログラムがきっかけで、自分自身を成長させることができました。
- 色々な人との出会い、価値観、成長が会ったので、在学生中にインターンシップに挑戦し繁樹を受けました。
- 元々は積極的に動けないタイプであったが、学生交流プログラムの参加した学生は積極的であった。深い関係になれた人いたらさらに良かった。
- 友達に誘われたから参加した。大部屋にあせった。何かを始めるきっかけとなり、4年間積極的に動くように心がけた。
- 同じ学年の学生からの刺激が強い。
- ボランティアサークルを立ち上げるきっかけとなった。
- サポーターになることにより、受講生と運営側の視点を養うことができ、限られた時間の中で課題に

向けて取り組み方法を学ぶことが出来た。

- 入学時は専門知識のみ力をつければ良いという訳ではなく、社交性、コミュニケーション能力など人間力を鍛えることが重要である。
- 予習復習ではなく、授業に集中することが大切。
- 3年から専門科目が増えるため、主体的に学ぶことに気をつけた。
- 先生から講義を受けるだけでなく、自分から動かないと本当の知識は得られない。教師になりたいと思ったのは学生交流プログラムがきっかけ。
- 楽をするよりも苦しいところに身をおくことを選ぶようになった。妥協するよりも上を目指す。
- 4年間、毎日忙しかったが、終わると物足りなくなった。その後、空き時間を作らずにスケジュールを埋め尽くすよう行動した。
- 大学生は遊べる自由な時間があるが、将来に回りに影響が与えられる人物になるようになりたい。
- 大学に入学してよかった。福工大の生徒は仲間が多く、ピュアなイメージである。行動力のある人が多い。
- 今も仲が良くつながりがいまだにある。
- 学内でディスカッションの機会があってもやる気がない人が多く、学生交流のような環境の中で行えなかったことに不満を感じる。
- 1年生の夏休みという時期が良い効果をもたらしている。
- 大学生活の中では、FIT隊の活動など様々なことにチャレンジしたが、原点には学生交流がる。
- 修学旅行等ですでに東京に行ったことがある人もいたが、半数は低額で東京に行けることに魅力を感じ申し込んでいた印象。

## 新潟大学

- ①これからも何らかの形でこの取り組みは継続していただきたい。そしたら先輩社会人として登壇したい。
- ②いろいろなことに首を突っ込みすぎてしまったために中途半端になってしまったこともあったので、自分のキャパをどれだけ広げられるかとどれにリソースを割くかの判断が課題。
- 特殊な学部だったため、このプログラムやキャリア共がなかったら他学部知り合いはできなかったと思う。勇気を出して参加して良かったと思う。
- 学生交流プログラムに参加者・サポーターの2つの立場から携わることができ、誇りに思うのと同時に、このプログラムに本当に感謝しています。大学生活4年間を振り返ったときにまず出てくるものがこのプログラムであり、このプログラムを境に変

わった価値観や考え方、起こった出来事がたくさんあります。自分自身の成長のきっかけを創ってくださり、本当にありがとうございました。

- 参加のきっかけは、授業にて案内が出た際に、安く東京に行けて楽しそうだったから、友達と参加した。
- グループワークが苦手な学生は多いが、自分は得意であるため、議論できる機会が多いのは魅力であった。
- 一番印象に残ったのは2日目のセイジョークエスト。フットワークが軽い学生に刺激を受けた。
- 学生交流は、確実にその後の生活にインパクトを与えた。就職活動時の進路選択でもその影響は大きかった。
- 真剣な話をしても恥ずかしくなく語れる仲間が全国に出来たことにより、今も数ヶ月ごとにSNSで連絡を取ったり直接会っている。
- 主体的な学習のイメージは本心で行動するということ。
- 学生交流で関係が続いているのは学内よりも学外の仲間のほうが濃い。
- 大学で学んだことにより、経験、知識が増えたため、キャリア観が大きく変化した。
- 学生交流で見えた自身の課題は、見渡す力が不足していたこと。つっぱしならないように気をつけることにした。
- やりたいことに嘘をつきたくないため、夢に実現のために進路選択に大きな決断をした。
- 自分の中の軸として、1年生のときはなかったが、4年生は何かを成し遂げたいという軸がある。
- 大学生活で、就職活動は本心とのズレがありつらかった。
- 学生交流が良かったと考えるひとと良くないと考える人との差は、参加して学んだことを何かにつなげられた人とそうでなかった人の差
- 学んだがゆえのモラトリアム
- 1年生の夏休みという時期に限られた時間で集中的に学ぶことの効果がよい関係性を生み出している。
- 社会人や地域が異なる学生と本音で話せたことにより世界が広がった。その後もSNSで繋がることにより、ターニングポイントを共有できている。
- 参加のきっかけは、サークルと授業でふわふわしていたが遊ぶ以外にも何かを試してみたかった。
- 参加のきっかけは授業にて案内があったことにより、興味をもったこと。また、時間も空いていたので、参加してみようと思った。
- 主体的に学ぶ大切さについて、プログラム中に社会

人に質問することにより見出せた。その後もわからないことはそのままにしないよう心がけ勉強に取り組んだ。

- ワールドカフェの中で、授業料を具体的に計算して、無駄になるコストを明確に考えていた人がいて、刺激を受けた。
- SNSで定期的に連絡を他大学の人ととることにより、負けたくないという気持ちを絶やさずに過ごすことができた。
- サポーターを経験することにより、全体像をイメージしてコミットすることを学んだ。また、参加学生へのかかわり方の難しさを学んだ。
- 勉強だけでなく、色々なことに挑戦した。(一人旅、サークル、アルバイト、資格取得等)
- 狙いを持って行動する。つまらないと思うことも、身近な話題に置き換えて興味を持つ。読書時間を増やす。
- 大学3年次に、地元(山形)で学生交流プログラムに参加したことが、その後の進路選択に大きな影響を与えた。
- 授業、サークル、サポーターの業務が集中してしまい、ひとりではこなせなかったが、周囲に助けられた。
- 1人で勉強していて辛いときでも、学生交流で一緒に学んだ学生も頑張っていると思うと、最後まで頑張ることが出来た。
- 学生交流参加後から、新しいコミュニティに参加することに意欲的に行った。
- 新しいコミュニティに参加するときは、話を聞きだすことに注意する。また自己開示することにより、距離感を縮める。
- 1年生の夏休みだからこそ、参加することができた。上級生になると就職活動に関する事などテーマを変えないと集まらないかもしれない。
- 同じ大学だとライバルになるが、他大学だと純粋にリスペクトできる存在となる印象であった。

## 京都産業大学

- もちろん友達ができただけということも1つの良かった点ではあるが、それ以上に自分の人生・生活を振り返るいいチャンスだったと思っている。
- 長尾さんをはじめとする職員さんや松高先生には特にお世話になった。たくさんチャンスをいただいて、あまり上手く活用できなくて少し悔しいが、優秀な後輩や信頼のできる友人もできたので、私の大学生活を彩るプログラムの一つだったように振り返って思う。

## 成城大学

- 2年目に掲げられていたスローガン「出会いでキック なりたい自分」に今でもとても愛着があります。「なりたい自分」は今でも曖昧ですが、このプログラムはそれに近づくために私に必要な手段だったと確信しています。4年間、学生交流プログラムに携われて本当に良かったです。また、成城大学でこういった機会を学生に提供していただけたら、と願ってやみません。
- 1年生の早い段階でこのようなプログラムに参加することができて良かったです。これが2.3年生だったら、卒業までの期間が短く、その分だけやりたいことができなかったのではないかと思います。
- このような貴重な体験をさせていただいた大学職員の方々、サポーターの人たち、参加者の人たちにはとても感謝しています。人前で話すのが楽しいと気づけたのも、それを素直に聞いてくれる人たちがいたからだと思います。その後の学生生活を自信を持って楽しく過ごせたのは、このプログラムから影響を受けた部分が大きかったと思います。
- このプログラムでは毎年、立場や学年が変わるたびに多くの発見や学びがありました。後輩にも、私のようにこれまで挙げたような経験を是非してもらいたいと強く思っていますので、形が変わっても、今後もこのような事業を続けてほしいと思います。また、このプログラムは誰一人欠けても、成しえなかったと思います。参加者、サポーター、教職員の皆様の全員の力を合わせたことで、素晴らしいプログラムになったのだと思います。皆様のおかげで、毎年、本当に良かったです。ありがとうございました。

## 7. 学生交流プログラム ～総括と考察～

平成24年度に実施計画を立て、平成25年度からの4年間・計4回実施してきた学生交流プログラム(合宿プログラム)について、「平成25年度から平成28年度まで」の4年間の概要と学生の声(アンケート)を取りまとめ報告したが、このパートでは、それぞれの年度のプログラムを振り返るとともに、学生交流プログラム全般の総括と考察を行い、問題提起に繋げたい。

前述(「課題設定(問題意識)と軌跡」)の通り、平成25年度から平成27年度までは、毎年同じプログラムを実施するというのではなく、年度毎にプログラムを見直し、学生にとってどのようなプログラムがより効果的に「主体的な学び」を促進させられるかを検討しつつ、プログラムを構築した。平成28年度はこれまでの成果をふまえて、平成27年度プログラムをベースに実施した。

### ○1年目:平成25年度総括

1年目(平成25年度)は、テーマを「大学で学ぶ意味は何かを考えよう」と設定し、プログラムの中核を「社会人による講演とディスカッション」とした。具体的には、4大学の学生を均等に4グループに分け(4教室に配置)、教室を4名の社会人が交代で回るというスタイルを取ることで、30名弱の学生と1名の社会人が近い距離でコミュニケーションを取るという場面を実現した。この際の内容は、①それぞれの講師(社会人)の仕事内容や働いている上で感じていることについてのプレゼンテーション、②社会人への質疑応答で、それぞれの社会人から「本音」を聞くことで社会の一端を垣間見ることができ、「働くこと」を漠然と想像・理解することで、そこに至るまでの「大学生活」をどのように有意義に過ごすべきなのかを考える機会とした。

1年目を終えての感想と印象としては、我々が想像していた以上に①大学生活を他大学生と共に具体的に考えること、②社会人から話を聞くこと(コメントやプレゼンテーション)、が参加学生に大きなインパクトを与えたということである。

大学に入学して4ヶ月ほどの学生が、大学生活に慣れ始めた時期に「大学で学ぶ意味」や「大学生活を充実させるにはどうすべきか」などを他大学の学生と共に真剣に考えるということは、これからの学生生活に多大なインパクトを与えるきっかけとなったことは間違いない。自身が所属する大学の学生同士では、気恥ずかしさも手伝って、なかなか将来の夢や目標を互いに話し合ったり、共有・アドバイスし合うことは現実問題として難しいが、会ったばかりの学生だからこそ真面目に話し合えたり、学生交流プログラムというその空気感が学生に「真剣に語らせる」雰囲気醸成した。また、すでに大学生活を終えて社会で活躍する社会人から、社会のリアルな話を聞くこと、そしてアドバイスを受けることで、単に大学生活だけをイメージするのではなく、大学生活のその先にある「社会」について想起することで、結果として大学生活をどのように過ごしていくべきかを具体的に考えるきっかけとなった。一方で、我々の反省点としては、①参加学生がじっくりと内省する時間を確保することが出来なかったこと、②社会人の話は「社会のリアルを知る」という意味では非常にインパクトがあったが、社会人が発した「キーワード」のみが学生の記憶に強く書き込まれることで、それ以上の考えに繋がらなかったことが挙げられた。

しかし、学生にとっては大いに刺激になったことは間違い無く、同時に、初年度である1年目の参加学生の有志が、その後、同プログラムを運営していく上で欠かすことのできない「サポーター学生」となった。

### ○2年目:平成26年度総括

1年目の反省点をふまえて、2年目(平成26年度)は、テーマを「出会いでキツクなりたい自分」と設定した。また、この年から、プログラム構築及びテーマ設定の会議に、前年度同プログラムに参加した学生を中心とした「サポーター学生」も係わり検討した。

1年目に招いた「社会人」は、社会で大いに活躍する社会人ではあったが、参加学生に身近であったかと言えば必ずしもそうではなかったため、2年目のゲスト講師は、参加学生がより身近に感じられると思われ

る各大学のOBOGとし、プログラムの中核を「各大学の卒業生である社会人との連携・協働」とした。具体的には、各大学の卒業生総勢19名を招き、OBOG、参加学生、サポーター学生によるグループを形成して、グループワーク、全体共有を行った。グループワークのテーマとしては学生が身近に経験すると思われる問題をケーススタディにて取り上げ、グループで協議した。前年度よりもさらに少人数のグループを形成することで、より近い距離でコミュニケーションを取るという場面を実現した。卒業生社会人からのアドバイスやコメントは、学生にとって身近でありながらもロールモデルとして多くのヒントを得ることができた。一方で、我々の反省点としては、①グループを形成した卒業生社会人とは十分にコミュニケーションを取ることができたが、それ以外の卒業生社会人とコミュニケーションを取る機会が少なかったこと、②ケーススタディが難解なテーマで、議論のまとめが困難だったことが挙げられた。

この年から「サポーター学生」の活躍が目覚ましく、学生交流プログラム運営において、サポーター学生の活躍は必須条件となった。

### ○3年目:平成27年度総括

2年目の反省点をふまえて、3年目(平成27年度)は、テーマを「大学で学ぶ意義とは—それぞれにとっての主体的学修について考える—」と設定した。1、2年目は、「社会人」をゲスト講師として招き、「社会人」の視点から学生に対して様々なアドバイスや情報提供を行っていただいたが、あらためて学生の主体的な学修を促進するためには「大学で学ぶ意義」を明確にしていくことが重要であると考え、各大学の担当教員が日頃「キャリア教育」を通じてどのようなことを学生に教えているのかをふまえつつ、プログラムの中核を各大学の担当教員が担うことで共通のテーマをもって授業を企画運営し、授業を担当した。

具体的には「主体的な学び」を促すために、4大学が自大学において、それぞれに強みとしているプログラムを持ち寄り実施した。4大学の教員・学生が一堂に会しての合宿型プログラムであるからこそ実現できる教育効果を重視し、過年度の実施内容を踏まえ、「ジグソー法」という学習理論を用いて協同学習を行うことにより、4大学が強みとして持つプログラムとそれぞれがもたらす学修成果を、学生は短時間で実感することができた。一方で、我々の反省点としては、①学びを深化させるためには時間が不十分だったこと、②ジグソー法の教育効果が必ずしも活かせなかったことが挙げられた。

なお、この年のプログラムの実績をモデルケースとして、共同プログラムの成果物を作成した。

ジグソー法とは:全員が学ぶ学習課題を複数の下位課題に分け、各学習者は所属グループ(ホームグループ)を離れ、自分が割り当てられた下位課題を専門的(集中的)に学習する集団(専門グループ)で協同的に学ぶ。その後、ホームグループに戻りそれぞれが学習した内容を持ち寄り互いに自分が学んだ内容を紹介しあい、ジグソーパズルを解くように全体像を協力して浮かび上がらせる手法。それぞれが学習した内容は、自分しか詳しく知っている者がいないため、他のメンバーに教える必然性が生じることで教育効果を高める。

### ○4年目:平成28年度総括

最終年度である平成28年度は、これまでの反省点をふまえつつも、3年目である平成27年度に我々が考える理想的なプログラムの形式が確立したため、それをベースとしてプログラムを展開した。各大学の担当教員がこれまでの実績や共同プログラムの成果物を活用しつつも新たなチャレンジをすることで、結果として学生にとってより有意義なプログラムを展開することができた。また、サポーター学生にもおおいに参画してもらうことでプログラムのさらなる充実を図ることができ効率的な運営となった。



## ○キーワードから学生交流プログラムを振り返る

学生交流プログラムの実施を通じて、当初想定してはいなかったが、実施したことで見えてきたことやその副次効果について述べることにする。ここでは、学生交流プログラムにまつわる「キーワード」とともに述べる。

### (1) 学生サポーター

1年目より、プログラムの運営補助として、各大学2～3名の「サポーター学生制度」を導入した。スタート当初はプログラムの運営補助という役割を担うために招へいしたが、2年目以降は、同プログラムに参加した学生の中からサポーター学生を募り、プログラム運営に参画させることで、結果として受講学生の視点や大学生の視点からのプログラム運営にも繋がるとともに、サポーター学生の存在は参加学生にとって身近相談できる先輩としても機能し、また、サポーターを経験することによって、さらに成長する姿を見ることで、受講学生(1年生)とサポーター学生双方に成長感があるプログラムであることを実感した。

### (2) 事前事後学習

本プログラム実施に当たっては、合宿当日に注目が集まりがちだが、欠かすことのできないプログラムとして「事前事後学習」がある。事前学習では、本プログラムの受講を通じての目標設定や遠隔講義システムを介しての4大学合同事前学習の実施と、合宿当日に向けての準備を綿密に行うことにより、結果として合宿プログラムの充実に繋がることがわかった。また、振り返りとしての「事後学習」を通じて、単なる「合宿プログラム」から、冷静かつ客観的に受講学生自らプログラムを振り返ることで、自身の変化や成長に気付くきっかけとなった。

### (3) 教職協働

高等教育において教職協働の必要性は年々高まっているが、一方で、現実的には教員・職員が役割を分担して業務にあたっているというケースが多いというのが現状であり、真の意味での教職協働を実現するのは様々な課題がある。

本事業および本プログラムにおいては、実質的な教職協働にもチャレンジすることとし、「教職員の交流」も取組事業の一つとして掲げている。折しも「大学設置基準等の一部を改正する省令」(平成28年文部科学省令第18号)が平成28年3月31日に公布され、平成29年4月1日から施行されることとなったが、今回の改正では、全ての大学等に、その職員が大学等の運営に必要な知識・技能を身に付け、能力・資質を向上させるための研修(スタッフ・ディベロップメント。以下「SD」という。)の機会を設けることなどを求めるものである。今回の本事業および本プログラムでは、この「SD」についても様々な面で取り組んできたと言えるが、同プログラムでは、企画立案から当日の運営、そして、教職協働でプログラムを構築してきたという点においても、実質的な教職協働を展開してきた。また、4大学の教職員が実質的にプログラム構築および運営に共に携わったという点においては、文字通り「大学間連携」の好事例と言えよう。

### (4) ICT (Information and Communication Technology) の活用

前述・事前事後学習でも「遠隔講義システム」について触れているが、本プログラムを進めていくうえで、様々なICTの活用は必須であった。それは、事前学習におけるプログラム参加学生同士の交流から、学生サポーター同士のミーティング、また、教職員のミーティングと、利用頻度は多岐にわたっている。遠隔講義システムの活用に始まり、SNS(Facebook、LINE等)の利活用なくして本プログラムの成功はあり得ないと言っても過言ではない。

特にプログラムを進行させるうえでの教職員同士、学生サポーター同士のやり取りは、ICTを利活用して行われており、あらためて教育支援ツールとして必需品であることが明らかとなった。

## 8. おわりに

5年間の本事業において、合宿型の学生交流プログラムは、4年間・計4回実施することができました。併せて、合宿形式以外の交流プログラムも実施することで、結果として、当初計画していた最終年度の目標参加者数をクリアすることができました。

学生気質、地域性・専門性がまったく異なる4大学の学生が、一堂に会してキャリア教育プログラムを受講するという試みは、日本の大学においても珍しいものであり、どのような教育効果をもたらすのか、想定はしていたものの、具体的な成果は未知数でした。しかし、結果として受講学生の満足度が非常に高いプログラムを提供・実施することができたことで、あらためて「大学間連携」の重要性・必要性を痛感しました。「本プログラムがなければ出会うことができなかつた仲間がいる。そういった仲間からの刺激が自分の学生生活に多大なプラスの影響をもたらしている。だからこそ、学生交流プログラムは、私にとってなくてはならないものであり、学生生活を充実させるために絶対に必要なプログラムだった。」これは本プログラムを受講した学生の率直な感想です。

受講学生、そして、サポーター学生は、日頃接することがない他大学の学生と文字通り寝食を共にし、共通の課題に対して、時には悩み、時には議論することで、成長感を感じてきました。

本プログラムだけが参加学生の成長に繋がったとは言えません。むしろ、学生の成長には様々な要因があるでしょう。しかし、本プログラムがその一端を担えているとするならば実施したことに大きな意味があったと言えるでしょう。

本報告書は、事業概要、プログラム概要、学生の声、実施後の総括・考察という、報告書の形態としては珍しいスタイルになっていますが、参加した学生の様子や変化、そして、プログラムがもたらしたものを少しでも表現できていれば幸いです。

4大学はこの貴重な経験をもとに、平成29年度以降は、各地域においてリーダー校として、本プログラムで培ったノウハウを生かしてプログラムを実施する予定です。

今後、より多くの大学が学生交流プログラムに興味を持っていただき、実施を検討してくださったり、活用いただければ幸甚に存じます。

本報告書について、皆様の忌憚のないご意見・ご指導を賜れば幸いです。

平成29年3月  
学生交流プログラム  
主担当大学責任者：長尾 繁樹

発行：京都産業大学・新潟大学・成城大学・福岡工業大学  
編集：学生交流プログラム 主担当大学／成城大学  
（編集担当／長尾繁樹・村松あづさ）  
発行日：平成 29 年 3 月 30 日  
問合せ先：成城大学キャリアセンター  
TEL：03-3482-9079  
Mail：shugyo@seiyo.ac.jp



むすんで、うみだす。



真の強さを学ぶ。

新潟大学



成城大学

**FIT** Fukuoka Institute of Technology  
福岡工業大学